

# 高崎古墳群 ほか

高崎古墳群第7次発掘調査

小沢原遺跡第15次発掘調査

山王遺跡第83次発掘調査

平成23年7月

多賀城市教育委員会



## 序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの文化財は、連綿とした月日の中で守り引き継がれてきたものであり、本市が歴史のまちである所以はここにあります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務であります。そのため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところであります。

今回報告します3件の調査は、平成21年度と平成22年度に受託事業として実施した発掘調査であります。これらの調査においては、古墳時代から平安時代までの遺構や遺物が確認されました。

高崎古墳群第7次調査では、下層から古墳時代後期の須恵器が出土しました。これは北側隣接地の窯で焼かれたものと考えられ、東北地方における古墳時代後期の資料としては大変珍しく、また国府多賀城が設置される以前の本市の様子を理解する上で、貴重な発見といえます。さらには、平安時代の堅穴住居跡が3軒発見されるなど、丘陵部における当時の様子がより明らかとなりました。

小沢原遺跡第15次調査では、平安時代の建物跡や土壌を発見し、土壌からは役人が文書作成の際に使う円面硯が出土しました。ここから南西約200m離れた場所で発見した官人層の居宅と考えられる建物跡との関連が窺われ、国府多賀城周辺の状況を考える上で大きな成果となりました。

山王遺跡第83次調査では、古墳時代の前期に広大に拡がっていたと考えられる水田跡を発見しました。

市内の広大な遺跡に比べ、これら3件の調査した範囲はごくわずかですが、それぞれ貴重な成果を得ることができ、各時代における人々の活動を明らかにすることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より深く感謝申し上げます。

平成23年7月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

## 例　　言

- 1 本書は、平成21年度および平成22年度の受託事業として実施した発掘調査3件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 4 挿図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1996）を参考にした。
- 6 本書の執筆は、担当職員の協議のもとに、I・II章は村松稔、III・IV章は石川俊英が担当し、編集は村松が行った。また、図版作成などは各担当者、遺物の写真撮影は鈴木琢郎・畠山未津留が担当した。
- 7 高崎古墳群第7次調査の報告に際し、木本元治氏（国見町教育委員会）、三好美穂氏（奈良市埋蔵文化財センター）からご教示を賜った。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	高崎古墳群第7次調査	3
III	小沢原遺跡第15次調査	27
IV	山王遺跡第83次調査	35

## 調　　査　　要　　項

平成21年度（高崎古墳群第7次調査）

- |         |                               |     |       |
|---------|-------------------------------|-----|-------|
| 1 調査主体  | 多賀城市教育委員会                     | 教育長 | 菊地 昭吾 |
| 2 調査担当  | 事務局文化財課                       | 課長  | 高倉 敏明 |
| 3 調査担当者 | 事務局文化財課調査普及係                  | 研究員 | 村松 稔  |
|         |                               | 調査員 | 鈴木 琢郎 |
|         |                               |     | 四家 礼乃 |
|         |                               |     | 畠山未津留 |
| 4 調査協力者 | 戸枝 博                          |     |       |
| 5 調査従事者 | 赤間 力 大場孝也 工藤博文 今野和子 佐藤 正 中村敏雄 |     |       |
| 6 整理従事者 | 丑田明希 佐々木清子 宮城ひとみ              |     |       |

平成22年度（小沢原遺跡第15次調査 山王遺跡第83次調査）

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 加藤佳保
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 石川俊英  
調査員 鈴木琢郎
- 4 調査協力者 加藤さかえ 熊谷正男
- 5 調査従事者 泉 力郎 大江かおり 片倉 忠 奥 清志 斎藤秀美 鈴木美紀  
鈴木幸夫 中村敏雄 藤田恵子 山田 理 若生要一
- 6 整理従事者 丑田明希 佐々木清子 宮城ひとみ

No.	遺跡名・調査次数	所 在 地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	高崎古墳群第7次調査	高崎二丁目505、506、507	2009年11月26日～2010年1月27日	50m <sup>2</sup>	村松
2	小沢原遺跡第15次調査	浮島二丁目28-8	2010年4月9日～2010年4月29日	80m <sup>2</sup>	石川・鈴木
3	山王遺跡第83次調査	山王二区129、129-1、130の一部、131の一部	2010年7月27日～2010年10月30日	300m <sup>2</sup>	石川・鈴木

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。  
 S B : 捜立柱建物跡 S I : 壺穴住居跡 S A : 柱列跡 S D : 溝跡 S K : 土壙  
 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」（多賀城市教育委員会 2003）に従った。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、「多賀城跡 政府跡 本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋『火山灰とテフラ』『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹『東北地方、10 C頃の降下火山灰について』『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

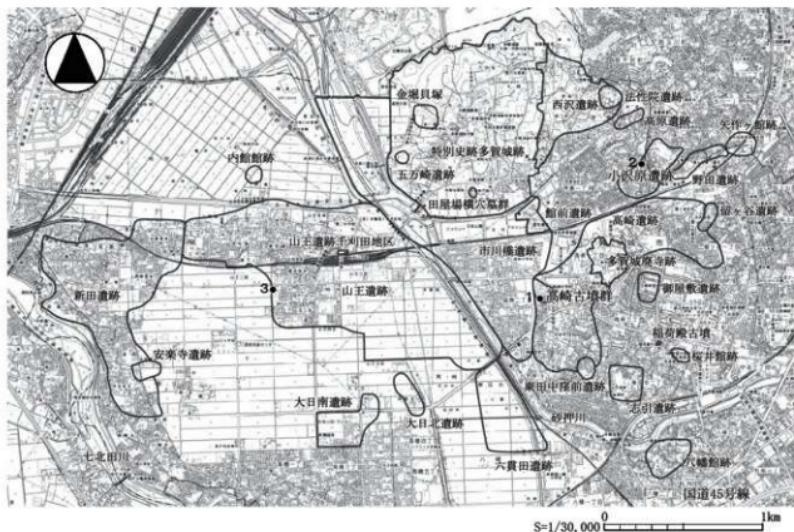
## I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせている。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉・塩釜線沿いには標高5～6mの微高地が延びており、その北側には利府町にまたがる低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。

本書で取り上げるのは、以下の3遺跡である。

高崎古墳群は、北西側に張り出す低丘陵の先端に立地し、その範囲は東西約120m、南北約140mである。かつて古墳が3基あったといわれているが、現在確認できるのは1号墳の1基のみである。古墳は調査が実施されていないため詳細は不明であるが、1号墳の規模が大きいことから古墳時代中期と推定されている。発掘調査はこれまで、古墳の周辺で行われており、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを発見



第1図 調査地の位置

しているが、いずれも古代のものである。また、遺跡の北端では東西大路東道路に関わる整地層を発見しており、丘陵部に向かって道路が延びていた可能性が考えられる。

小沢原遺跡は、標高約8mの低丘陵に立地し、その範囲は東西・南北ともに約400mである。これまでの発掘調査では、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土器埋設遺構などいずれも平安時代を中心とした遺構・遺物が発見されている。特に第1・2次調査では、官人層の居宅の可能性を窺わせる桁行き5間以上、梁行き3間の掘立柱建物跡が確認され、第5次調査では、土器埋設遺構が発見されている。一方、昭和27年に遺跡の約300m西側の地点で、大量の古銭が発見されている。大部分が紛失したとされているが、残存する204枚全てが中国銭であることから中世の備蓄銭の可能性も考えられている。

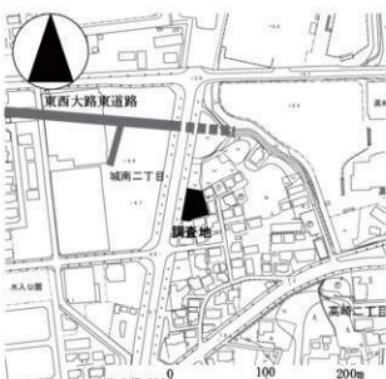
山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまで多くの調査が行われており、弥生時代から近世までの遺構と遺物を発見している。弥生時代中期では水田跡を発見しているが集落については確認されておらず不明である。古墳時代前期については、堅穴住居跡の発見例がごくわずかで集落の具体的な様子は明らかではないが、同時期の水田は本遺跡や西側の新田遺跡の広い範囲で営まれていたことが明らかとなっている。古墳時代中期になると、八幡地区の微高地上に多数の堅穴住居がつくられるようになり、集落が形成されていたことが明らかとなっている。集落は位置をかえて古墳時代後期にも存続している。ここからは、多量の土器に混じって関東系土師器などが出土したほか、柄香炉など一般集落ではみられないものも出土していることから、拠点的な集落であったと考えられる。古代では多賀城南面に形成された地方都市の幹線道路（東山道の一部）である東西大路を発見している。近年の調査成果では、東側に隣接する市川橋遺跡も含めて、沿道には上級官僚の邸宅が立ち並んでいるのに対し、大路より離れた区画には下級役人の住まいが設けられているなど、地割内での階級による土地の選定が行われていたことも判明している。中世では八幡地区において堀で方形に区画した屋敷跡が発見されている。屋敷跡の居住者については、本遺跡一帯が留守氏が支配する「高用名」及び「南宮庄」に比定されている地域であることから、それに関連した武士層であったと推測される。近世では、塩竈街道を踏襲していると考えられる県道泉塩釜線に面した地区で、掘立柱建物跡や井戸跡などが発見されている。このうち西町浦地区では、かつて酒造業を営み塩竈一の宮の「御神酒屋」であった加賀屋の屋敷内を調査しており、大規模な堀跡と井戸跡が発見され、堀跡からは陶磁器や木製品・石製品などが多量に出土している。町・伊勢地区では堀で区画された南北に細長い屋敷跡が発見されている。町・伊勢地区周辺では17世紀初頭に伊達家家臣成田氏とその配下の足軽が移住した土地とされており、街道沿いにはこのような屋敷が立ち並んでいたと考えられる。

## II 高崎古墳群第7次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

今回報告する調査は、宅地造成工事に伴う確認調査（第5次）とその後実施した本発掘調査（第7次）である。平成21年8月20日に地権者より当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、3区画宅地を造成するに伴い、幅3.1m、長さ13.5mの専用通路を布設し、その際に現地表から最深1.4m掘削する内容であった。北側隣接地の第2次調査では、堅穴住居跡をはじめとした古代の遺構を多数発見しており、遺跡への影響が懸念された。平成21年9月1日に依頼書と承諾書の提出を受けて、遺構の分布状況を把握するための確認調査を実施することとした（第5次）。確認調査は、9月8日から開始した。重機で表土（I層）を除去したところ、深さ14cm～1.1mで堅穴住居跡などの遺構を確認し、写真や図面などの記録を作成した後、11日に埋め戻しを行った。これを踏まえて、再度地権者と協議を行ったところ、計画を変更することは不可能との結論に達したことから、記録保存に向けた本発掘調査を行うこととなった（第7次）。

11月26日、重機で表土（I層）を除去し、確認調査で発見した遺構を再度検出する。調査対象となる道路の長さが、最初に提出された設計図と比べて、約2m短く変更されたため、調査区東側の一部は確認調査にとどめた。II層上面での遺構検出作業の結果、27日にはS I 21堅穴住居跡を確認した。これ以後、写真撮影や図面作成など必要な記録を随時作成した。12月3日にS I 20堅穴住居跡を、18日にS I 19堅穴住居跡を検出した。19日には、調査区西端のIII層から、古墳時代後期墳の須恵器が出土したことにより、下層に遺構などの存在が推定された。1月16日から、III層上面の調査を開始し、S B31掘立柱建物跡などを検出した。21日からIV層上面及びV層上面の調査を行ったが、遺構は発見できなかった。1月27日、機材の撤収と埋め戻しを行い、現地調査を終了した。



第1図 調査区位置図



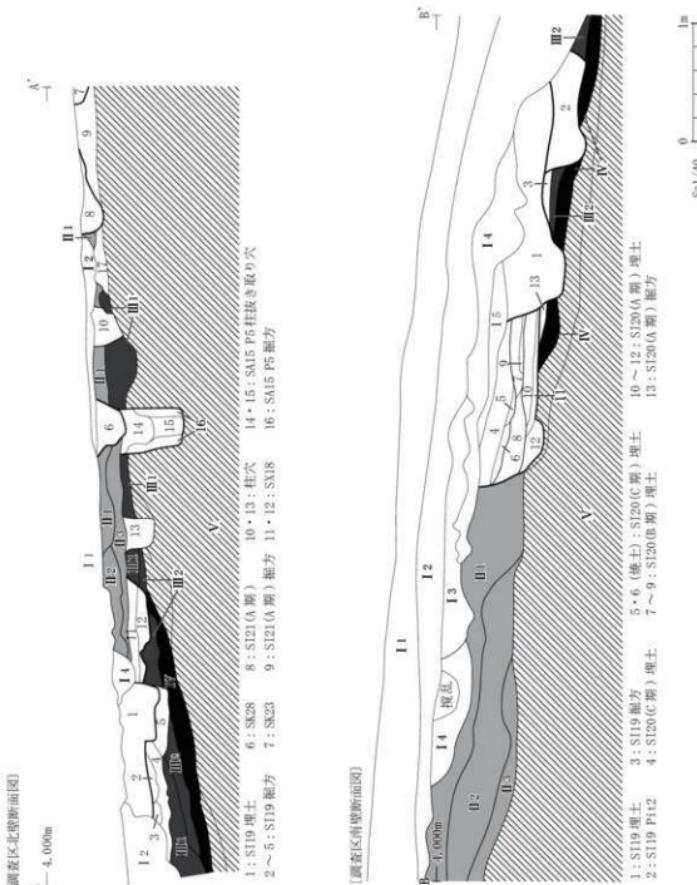
第2図 調査区位置模式図

## 2 調査成果

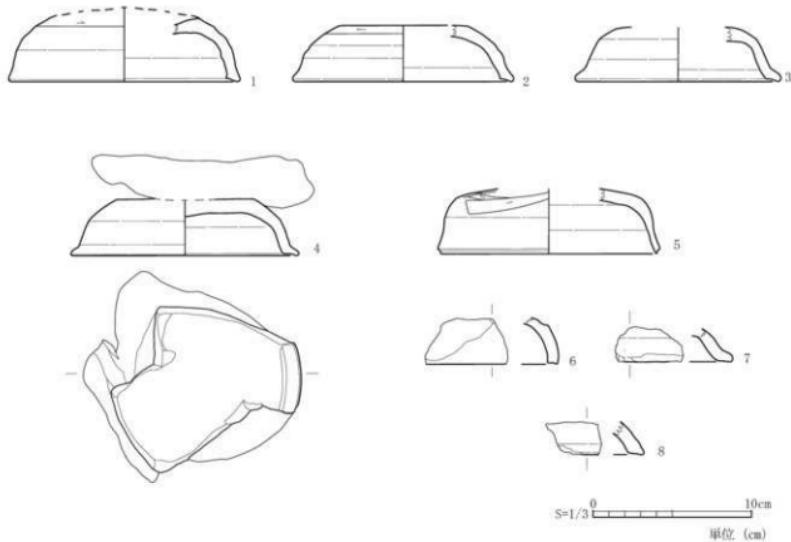
### (1) 層序

今回の調査で発見した層序は以下のとおりである（第3図）。

- I層 現代の盛土層で、厚さは49cm～1m。現地表が、ほぼ水平であるのに対して、II層上面の遺構検出面は西側ほど低くなっているため、東側は薄く、西側は厚くなっている。
- II層 調査区の西側を覆う褐色砂質土で、厚さは10～51cm。南側が厚く堆積している。内容物により3層に細分される。II層はIII層に起因する土を斑状に含んでおり、II2層は炭化物と焼土を少量含む。II3層は炭化物を少量含んでいる。上面は古代の遺構検出面である。
- III層 調査区の西半分を覆うにぶい褐色砂質土で、厚さは5～24cm。2層に細分でき、下層ほど炭化

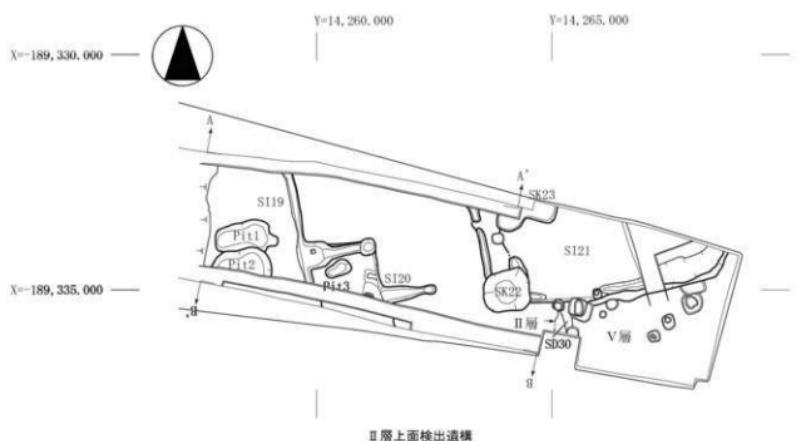
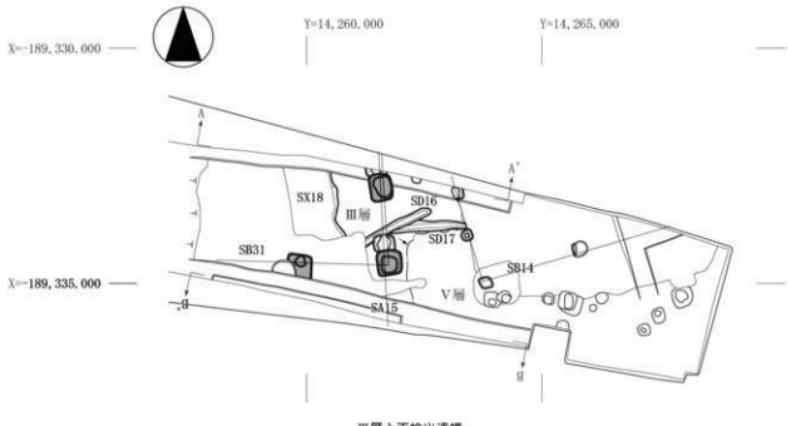


第3図 調査区断面図



番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	天井径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・蓋	III2層	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(14, 3) 12/24	—	—	4-1 4-4	R1	
2	須恵器・蓋	III2層	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	5/24	(8, 1) 1/24	3.55	4-1	R38	
3	須恵器・蓋	III2層	ロクロナデ	ロクロナデ	(12, 6) 1/24	(7, 3) 1/24	3.45	4-1	R42	
4	須恵器・蓋	III2層	ロクロナデ	ロクロナデ	(14, 4) 2/24	(8, 6) 8/24	3.5	4-1 4-2 4-3	R25	焼き台と融着
5	須恵器・蓋	III2層	ロクロナデ 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13, 6) 6/24	—	—	4-1	R63	
6	須恵器・蓋	III2層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	4-1	R64	
7	須恵器・蓋	III2層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	4-1	R43	
8	須恵器・蓋	III1層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	4-1	R62	

第4図 III層 出土土器



0 5m  
S=1/100

第5図 遺構平面図

物を多く含む。上面は古代の遺構検出面である。古墳時代後期の須恵器が出土している（第4図）。

IV層 調査区の西半分を覆う黒褐色土層で、厚さは5～15cm。旧表土と考えられる。

V層 明褐色土で基盤層である。

## (2) 発見した遺構と遺物

今回の調査では、III層上面で掘立柱建物跡や柱列跡、溝跡、II層上面で竪穴住居跡、土壤、溝跡を発見し、各遺構からは土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、製塩土器などが出土した。以下、検出面ごと説明する。

### III層上面検出遺構

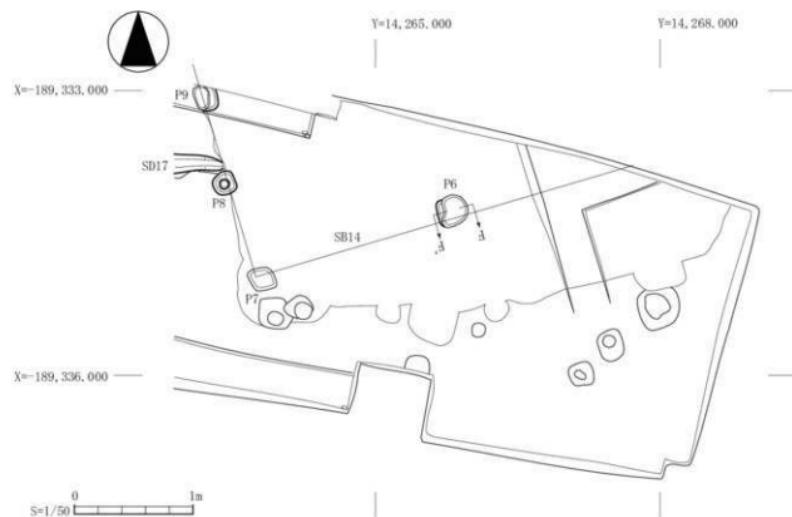
#### S B14掘立柱建物跡（第3・5・6・7図）

調査区東側で発見した南北3間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡である。柱穴は4基確認し、西側柱列南から1間目柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴では、柱抜き取り穴を確認した。方向は西側柱列で測ると、北で約16度西に偏している。規模は、西側柱列で2.0m以上、柱間はいずれも約1.0mで、南側柱列では4.0m以上、柱間は約2.1mである。掘方の平面形は方形で、規模は南側柱列西から1間目柱穴でみると一辺25cm、深さ14cmである。掘方埋土はV層に起因する土を斑状に含む褐色土である。柱抜き取り穴埋土は炭化物とV層に起因する土を斑状に含む褐色土である。

遺物は、掘方から須恵器杯、柱抜き取り穴から土師器、須恵器が出土している。



第6図 S B14 掘立柱建物跡 断面図



第7図 S B14掘立柱建物跡 平面図

### S B31掘立柱建物跡（第5・8・9図）

調査区西側で発見した東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡である。S A15柱列跡と重複しており、これより新しい。柱穴は3基確認し、全ての柱穴で柱抜き取り穴を確認した。方向は東側柱列で測ると、北で約4度西に偏している。柱間は、東側柱列で約1.7m、南側柱列で約1.9mである。掘方の平面形は方形で、南東隅柱穴でみると一辺45～50cm、深さは25cmである。掘方埋土はV層に起因する土を斑状に含む褐色土、柱抜き取り穴埋土は炭化物を含む褐色土である。

遺物は、柱抜き取り穴から土師器甕（B類）、須恵器、掘方から須恵器甕が出土している。

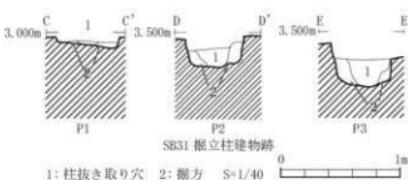
### S A15柱列跡（第3・5・9図）

調査区中央で発見した南北2間以上の柱列である。S B31掘立柱建物跡とS D16溝跡と重複しており、S D16溝跡より新しく、S B31掘立柱建物跡より古い。検出した全ての柱穴で柱抜き取り穴を確認した。方向は、北で約4度西に偏している。柱間は約1.5mである。掘方の平面形は方形で、南側の柱穴でみると長辺40cm、短辺30cmである。掘方埋土は、V層に起因する土を斑状に含む橙色粘質土、柱抜取穴は炭化物とV層に起因する土を斑状に含む褐色砂質～粘質土である。

遺物は、柱抜き取り穴から須恵器甕が出土している。

### S D16溝跡（第5・9図）

調査区中央で発見した東西方向の小規模な溝跡である。S A15柱列跡およびS D17溝跡と重複してお



第8図 S B31掘立柱建物跡 断面図



X=-189, 333.000 ——

Y=14, 260.000

Y=14, 263.000

X=-189, 335.000 ——

P1

P2

V層

P3

P4

III層

P5

P6

II層

P7

P8

I層

X=-189, 335.000 ——

0 1m

S=1/50

第9図 S B31掘立柱建物跡、S A15柱列跡 平面図

り、S D17溝跡より新しく、S A15柱列跡より古い。方向は東で約27度北に偏している。規模は、長さ1.5m以上、幅20cm、深さ8cmである。壁は斜めに立ち上がっている。底面は西に向かって低くなっている。埋土は褐色砂質土である。

遺物は、土師器が出土している。

#### S D17溝跡 (第5・9図)

調査区中央で発見した東西方向の小規模な溝跡である。S D16溝跡と重複しており、これより古い。方向は東で約1度北に偏している。規模は、長さ1.6m以上、幅23cm、深さ6cmである。壁は斜めに立ち上がっている。底面は西に向かって低くなっている。比高は7cmである。

遺物は、出土していない。

#### S X18不明遺構 (第3・5・9・10図)

調査区西側で発見した落ち込みである。規模は、南北1.6m以上、東西1.0m以上、深さ15cmである。壁は斜めに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。埋土は2層に細分できる。いずれも炭化物とV層に起因する土を斑状に含む暗褐色土であり、下層により多くの炭化物を含む。

遺物は、1層から土師器杯・甕（B類）、須恵器杯・甕、縁軸陶器、砥石（第10図）が出土している。

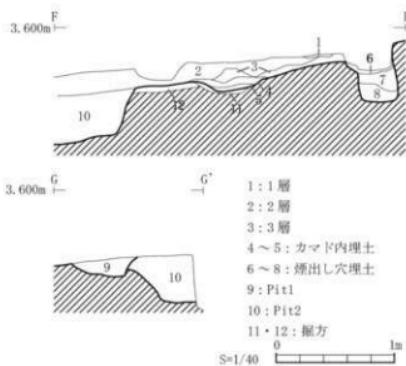
#### II層上面検出遺構

##### S I 19堅穴住居跡 (第3・5・11・12・15図)

調査区西側で発見した堅穴住居跡である。西側の大部分が後世の擾乱により壊されており、東側の一部を確認したのみであるが、平面形は方形と推定される。S I 20堅穴住居跡、S K26土壤と重複しており、これらより新しい。規模は、南北3.1m以上、東西2.2m以上、方向は東辺で測ると、北で約11度西に偏している。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、残存する壁高は22cmである。床は掘方埋土であるV層に起因する土を斑状に含む暗褐色砂質土層の上面である。掘方の底面までの深さは8cmである。住居内施設としては、カマドと周溝、性格不明の土壤であるPit 1とPit 2がある。床面は平坦で、地形を反映して西



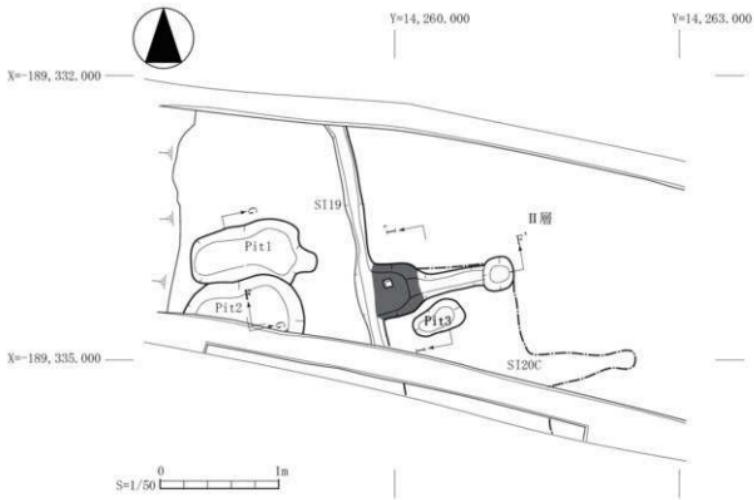
第10図 S X18 出土遺物



第11図 S I 19堅穴住居跡 断面図

側がやや低くなっている。その比高は6cmである。カマドは東壁に付設されており、燃焼部は東壁より外側に張り出している。燃焼部の規模は、奥行き53cm、幅61cmである。壁および底面は火を受けたことにより赤く変色しており、燃焼部中央では支柱とみられる立方体の石が据えられている。煙道は、長さ60cm、幅20cm、深さ16cmで、先端には規模は直径35cm、深さ50cmの煙出し穴がある。周溝はカマド前面も含め東辺全てで確認し、その規模は幅9~15cm、深さ12~19cmである。カマドの前面で、Pit 1とPit 2を確認している。これらは重複関係がありPit 1がPit 2より新しい。Pit 1について、平面形は不整形で、規模は長軸1.3m、短軸64cm、深さ16cmである。埋土は、炭化物を少量含むぶい黄褐色砂質土である。Pit 2について、平面形は梢円形で、規模は長軸1.3m、短軸75cm以上、深さ40cmである。埋土は炭化物とV層に起因する土を斑状に含む暗褐色砂質土である。住居内埋土は3層確認でき、1層は暗褐色砂質土、2層は黒褐色~暗褐色砂質土、3層は褐色砂質土である。全ての層には焼土、1層と2層には炭化物を含んでいる。

遺物は1層から土師器杯（BV類）（第15図1）・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）・甕、掘方から土師器杯（B類）、須恵器甕、製塙土器、カマド内埋土からは土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（III類）・甕、灰釉陶器楕、平瓦（II B類）、床面直上から須恵器杯（V類）、土師器杯（B類）・甕、須恵器甕、煙道から土師器杯・甕、須恵器杯（V類）・甕、煙出し穴から土師器杯（B類）、須恵器杯・甕、製塙土器が出土している。



第12図 S I 19堅穴住居跡 平面図

#### S I 20堅穴住居跡（第3・5・13・14・15図）

調査区西側で発見した堅穴住居跡で、住居北東部を確認した。S I 19堅穴住居跡と重複しておりこれより古い。平面形は方形であり、同位置で3時期の変遷（A→C期）を確認した。以下、古い順に説明

する。

**A期**：床は、掘方埋土である暗褐色砂質土の上面である。掘方の底面までの深さは5cmである。住居内施設には周溝があり、調査区北壁断面でのみ確認している。その規模は、幅40cm、深さ8cmで、埋土はV層に起因する土を斑状に含む暗褐色砂質土である。住居内埋土は2層確認でき、1層は少量の炭化物とV層に起因する土を斑状に少量含む暗褐色砂質土、2層は炭化物層である。

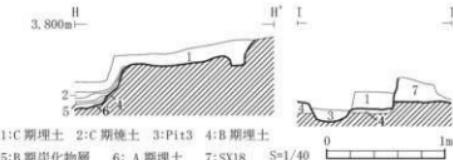
遺物は、1層から土師器杯（B類）・甕、須恵器甕、製塩土器が出土している。

**B期**：A期の床上面を整地し床としている。カマドなどの施設は確認できなかったが、C期のカマドと同じ場所で炭化物のまとまりを確認しており、ほぼ同位置に付設されていたと考えられる。住居内埋土は3層確認できた。1・2層は暗褐色土砂質土で、1層には黄褐色土が斑状に認められた。3層は炭化物層である。

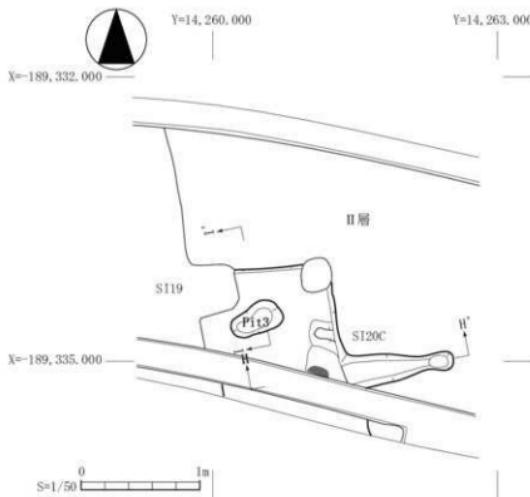
遺物は、1層から土師器杯（B II c類）、須恵器杯（III類）・甕が出土している。

**C期**：B期の床面を整地し床としている。規模は、南北1.8m以上、東西98cm以上、方向は東辺で測ると、北で約4度西に偏している。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、残存する壁高は27cmである。住居内施設には、カマドと貯蔵穴と見られるPit 3がある。カマドは東壁に付設されており、底面は火を受けたことにより赤く変色している。煙道は、長さ90cm、幅15～35cm、深さ13cmであり、先端には長軸25cm、短軸20cm、深さ21cmの煙出し穴が設けられている。Pit 3はカマド西側で検出している。平面は不整形で、規模は長軸55cm、短軸32cm、深さ15cmである。埋土は炭化物と焼土を含む褐色砂質土である。住居内埋土は1層で、炭化物と焼土を多く含む黒褐色砂質土である。

遺物は、1層から土師器杯（B II・B V類）（第15図2・3）・甕（B類）、須恵器杯（III類）、墨書き土器（第15図4）、瓦、床面上から土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、カマド内埋土から土師器杯（B V類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、煙道から土師器杯、須恵器甕、製塩土器、煙出し穴から土師器杯（B類）・甕（B類）、製塩土器が出土している。



第13図 S 120 竪穴住居跡 断面図



第14図 S 120 竪穴住居跡 平面図



番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・杯	S I 19 1層	ロクロナデ 底部：摩滅	ロクロナデ 黒色処理	(13.6) 12/24	(6.0) 20/24	4.8		R12	
2	土師器・杯	S I 20C 1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ。黒色処理	(15.8) 4/24	6.4 24/24	4.3		R20	B V 類
3	土師器・杯	S I 20C 1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ。黒色処理	15.1 24/24	6.5 24/24	4.6		R7	B V 類
4	土師器・杯	S I 20C 1層	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラミガキ。黒色処理	—	—	—		R24	

第15図 S I 19・20 壺穴住居跡 出土遺物

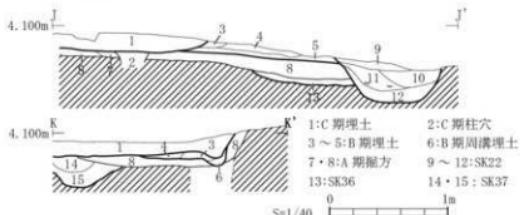
#### S I 21 壺穴住居跡（第3・5・16・17・18・19図）

調査区東側で発見した壺穴住居跡であり、住居南半部を検出した。SK 22・23・36土壤、SD 30溝跡、SX 37と重複しており、SK 22・23土壤より古く、SD 30溝跡、SK 36土壤、SX 37より新しい。平面形は方形であり、ほぼ同位置で3時期の変遷（A→C期）を確認した。

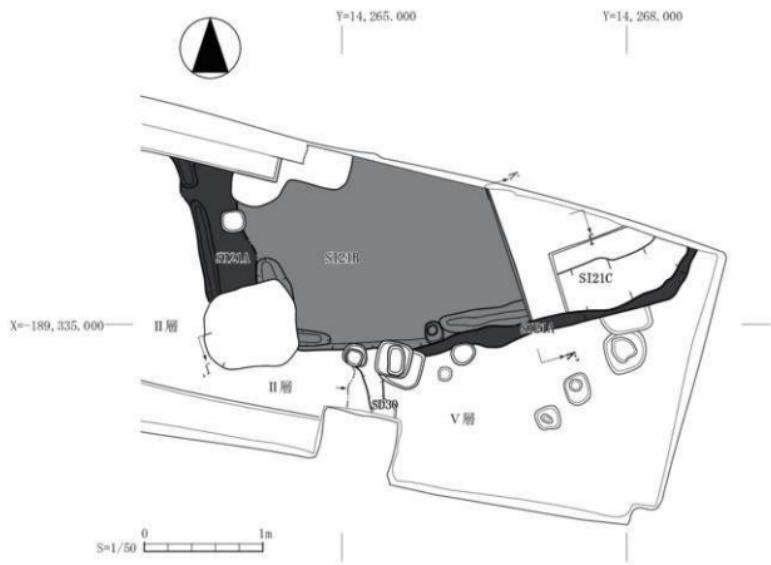
**A期：**上面の大部分がB・C期に破壊され、また後世の削平により、残存状況は悪く、周溝と掘方埋土を確認したのみである。規模は東西5.0m、南北2.4m以上である。床は、掘方埋土であるV層に起因する土を斑状に含む褐色砂層の上面である。床面はおよそ平坦で、地形を反映してやや西が低くなっている、その比高は9cmである。住居内施設は西辺の一部で周溝を確認しており、その規模は幅15～19cm、深さ18cmである。

遺物は、周溝から土師器甕、須恵器杯（III類）、床面から土師器甕、須恵器杯、掘方埋土から土師器杯（B類）・高台付杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）・甕・瓶が出土している。

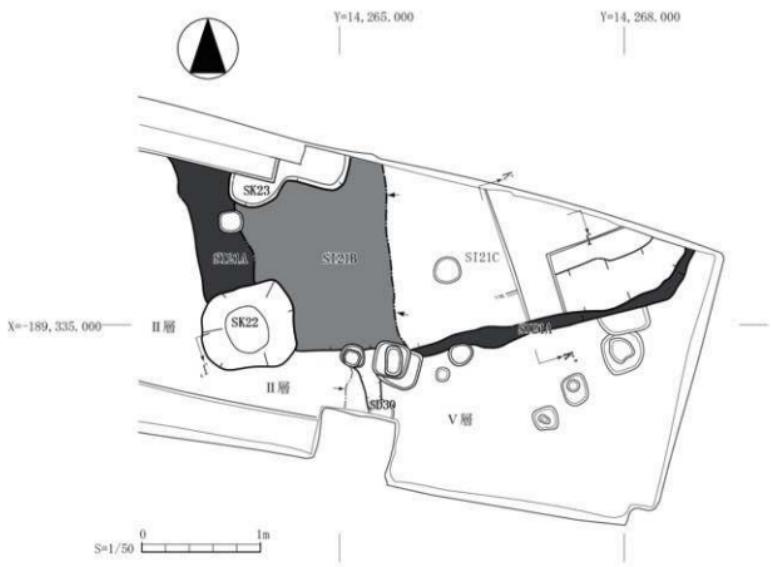
**B期：**A期をやや縮小してつくり直している。上面は後世の削平とC期に破壊されており、残存状況は悪い。規模は、東西4.2m、南北2.0m以上であり、方向は南辺で測ると東で約9度北に偏している。床面は、A期の掘方埋土の上面である。住居内施設は南辺と西辺の一部で周溝を確認しており、規模は



第16図 S I 21 壺穴住居跡、SK 36・37 土壤 断面図



第17図 SI 21(A・B期)堅穴住居跡 平面図

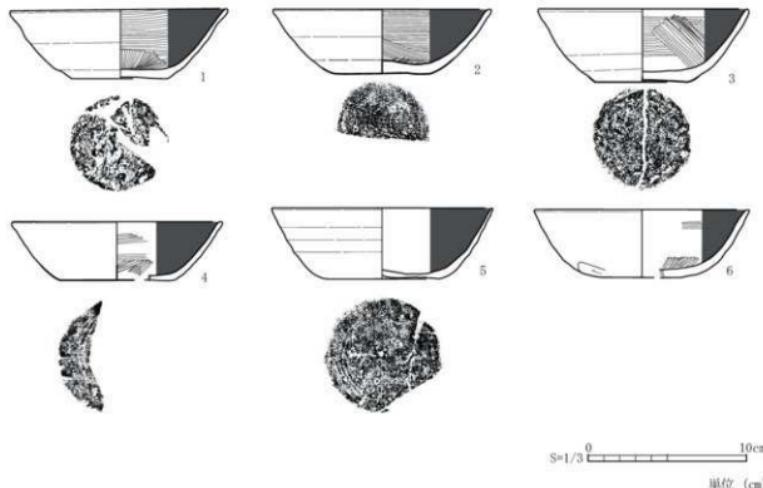


第18図 SI 21(C期)堅穴住居跡、SK 22・23土壤 平面図

幅16～30cm、深さ7cmである。住居内埋土は3層確認でき、1層は黒色砂質土、2層は黒褐色砂質土、3層は黒褐色砂質土である。いずれも炭化物と焼土を含んでいる。

遺物は、1層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、丸瓦（II類）、周溝から土師器甕、須恵器瓶が出土している。

**C期**：B期とおよそ同位置でつくりかえられたと考えられるが、後世の削平により西側は失われている。規模は、南北2.4m以上、東西3.1m以上である。方向は、南辺で測ると東で約15度北に偏している。残存する壁高は15cmである。B期の床上面を整地し床としている。住居内施設は、東辺で周溝を、南寄



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(13.8) 23/24	6.1 24/24	4.35	3-1 3-3	R5	BV類
2	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(13.8) 10/24	(6.0) 13/24	4.1	3-1	R6	BV類
3	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(13.1) 23/24	6.0 24/24	4.6		R10	BV類
4	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(13.3) 5/24	(7.2) 10/24	3.7	3-1	R11	BV類
5	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(14.0) 21/24	(7.0) 5/24	4.5	3-1 3-2	R14	BV類
6	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(13.6) 9/24	(5.0) 8/24	4.3	3-1	R18	BII類

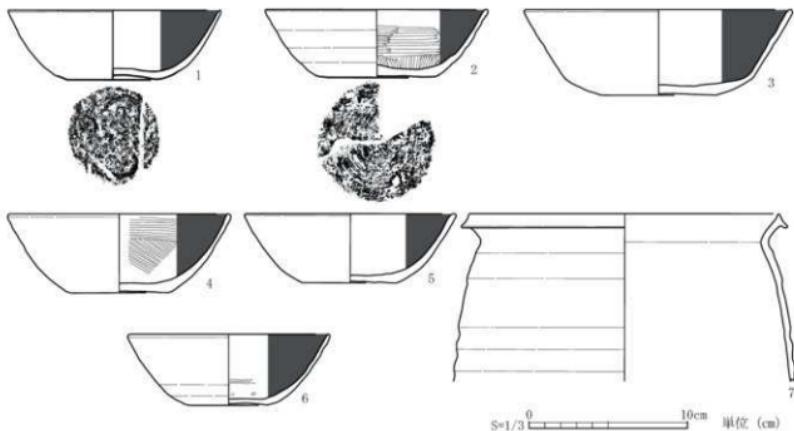
第19図 S121(C期) 積穴住居跡 出土遺物

りに柱穴を発見している。周溝の規模は、幅42～56cm、深さ6cmである。柱穴は1基のみ確認し、柱は抜き取られている。住居内埋土は、V層に起因する土を斑状に含む暗褐色砂質土である。

遺物は、1層から土師器杯（BII・BV類）（第19図）・高台付杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（II類）・甕・瓶、平瓦（II B類aタイプ）、製塩土器が出土している。

#### S K22土壤（第5・16・18・20図）

調査区東側で発見した土壤である。S I 21堅穴住跡と重複しておりこれより新しい。平面形は不整形で、規模は長軸98cm、短軸86cm、深さ35cmである。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は4層確認でき、1層は炭化物と焼土を多く含む極暗褐色砂質土、2層は炭化物と焼土を少量含む褐色砂質土、3層は炭化物を含む暗褐色砂質土、4層はV層に起因する土を含む褐色砂質土である。



番号	種類	層位	特徴		口径 口径 残存率	底径 底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(13.4) 18/24	5.4 24/24	4.4 3-4 3-5	R13	BV類、3層出土と接合	
2	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(14.1) 4/24	20/24	4.3 3-4	R8	BV類	
3	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：摩滅	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(17.0) 4/24	(7.2) 8/24	5.4 3-4	R23		
4	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：摩滅	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(14.1) 5/24	6.1 24/24	5.0 3-4	R9		
5	土師器・杯	1層	ロクロナデ 底部：摩滅	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(13.4) 6/24	6.0 24/24	4.4 3-4	R21	4層出土と接合	
6	土師器・杯	2層	ロクロナデ 底部：摩滅	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(12.8) 3/24	4.8 24/24	4.5 3-4	R16		
7	土師器・甕	1層	ロクロナデ 底部：摩滅	ロクロナデ	(19.6) 4/24	—	—	R58		

第20図 S K22土壤 出土遺物

遺物は、1層から土師器杯（B V類）（第20図1～6）、甕（B類）（第20図7）、須恵器杯・甕・長頸瓶、2層から土師器杯（B類）、須恵器杯、3層から土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯、4層から土師器杯（B類）が出土している。

#### S K23土壤（第3・5・18図）

調査区東側で発見した土壤である。S I 21堅穴住居跡と重複しておりこれより新しい。平面形は不整形で、規模は南北54cm以上、東西1.2m以上、深さ13cmである。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は、V層に起因する土を少量含む黒褐色砂質土である。

遺物は、土師器杯（B類）・甕、須恵器甕が出土している。

#### S K28土壤（第3図）

調査区北壁の断面でのみ確認した土壤である。規模は、東西48cm、深さ25cmである。底面は丸くくぼんでおり、壁は斜めに立ち上がっている。埋土はV層に起因する土と黑色砂質土を斑状に含む褐色砂質土である。

遺物は出土していない。

#### S D30溝跡（第5・18図）

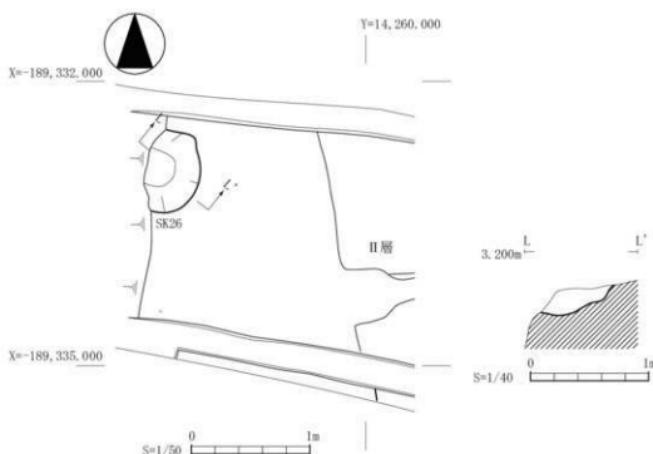
調査区東側で発見した小規模な溝跡である。S I 21堅穴住居跡と重複しており、これより古い。規模は、長さ50cm以上、幅15cmであり、方向は北で西に約10度偏している。

遺物は、出土していない。

#### 検出面不明な遺構群

#### S K26土壤（第21・22図）

調査区西侧で発見した土壤である。S I 19堅穴住居跡と重複しておりこれより古い。III層より新しい。



第21図 S K26 土壤 平面・断面図

が、S I 19堅穴住居跡に壊されているため、検出面は不明である。西半分を擾乱により壊されており、全体を把握できなかったが、平面形はおよそ円形と推定される。規模は直径88cm、深さ24cmである。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は、炭化物とV層に起因する土を含む暗褐色砂質土である。

遺物は、古墳時代後期の須恵器蓋（第22図）が出土している。



S=1/3 0 10cm 単位(cm)

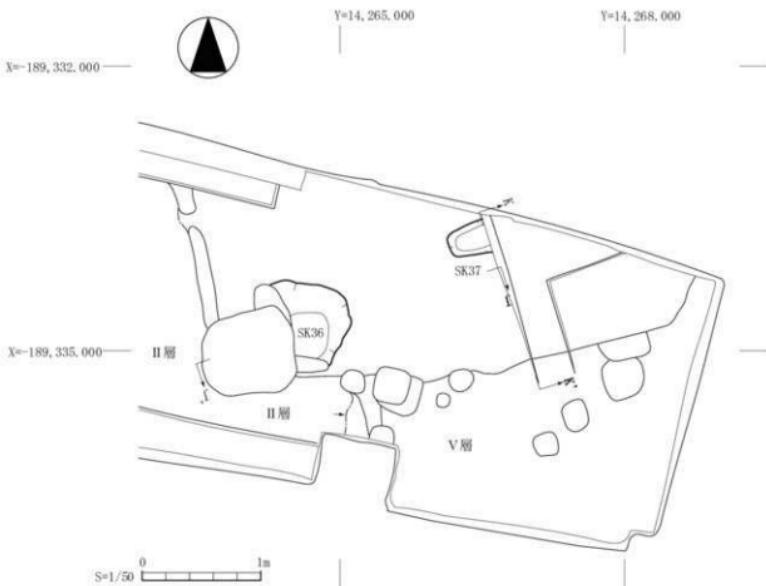
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	天井径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・蓋	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	—	R60	

第22図 SK26土壤 出土遺物

#### S K36土壤（第16・23図）

調査区東側で発見した土壤である。S I 21堅穴住居跡、SK22土壤と重複しており、これより古い。V層より新しいが、S I 21堅穴住居跡に壊されていることから、検出面は不明である。平面形は不整形と推測され、規模は南北76cm、東西61cm、深さ8cmである。埋土はV層に起因する土を含む褐色砂質土である。

遺物は、出土していない。



第23図 SK36・37土壤 平面図

## S K37土壤（第16・23図）

調査区東側で発見した土壤である。S I 21堅穴住居跡と重複しておりこれより古い。V層より新しいが、S I 21堅穴住居跡に壊されていることから、検出面は不明である。規模は、東西34cm以上、南北29cm、深さ26cmである。埋土は2層確認でき、1層は炭化物を含む暗褐色砂質土、2層はV層に起因する土を含む灰黄褐色砂質土である。

遺物は、出土していない。

### 3 考 察

#### (1) 遺構の年代

今回の調査では、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、土壤、溝跡、その他性格不明遺構を発見した。これらを検出面ごとに整理すると、II層上面検出の遺構群（S I 19・20・21堅穴住居跡、S K 22・23・28土壤）、III層上面検出の遺構群（S B 14・31掘立柱建物跡、S A 15柱列跡、S D 16・17・30溝跡、S X 18）、検出面が不明な遺構群（S K 26・36土壤、S X 37）に分けることができる。また、これら遺構の重複関係を考慮すると、第23図のように整理することができる。



第24図 遺構変遷模式図

はじめに、II層上面検出遺構群のうち遺物がまとまって出土しているII層上面検出のS I 21（C期）堅穴住居跡とS K 22土壤出土土器の年代を検討した後で、各遺構の年代についても若干検討をおこなう。次いで、III層上面検出遺構群、IV層出土土器についても検討を加える。

#### ① II層上面検出遺構群

S I 21堅穴住居跡は、3時期の変遷（A→C期）があり、各時期を合わせると総数336点の遺物が出土している

（表2）。出土遺物には、土師器杯・甕・高台付杯、須恵器杯・甕・瓶、丸瓦、平瓦、製塙土器があり、須恵器土器は全く出土していない。また土師器についてはすべてB類である。土師器と須恵器の構成比率は、A期が土師器79%、須恵器21%、B期が土師器83%、須恵器13%、C期が土師器82%、須恵器18%である（註1）。いずれも土師器の占める割合が8割程度と多い。C期の土師器杯については、B II

	底径/口径比	底径/口径比平均	点数
高 崎 古 墳 群	S I 19堅穴住居跡	0.44	-
	S I 20（C期）堅穴住居跡	0.41・0.43	0.42
	S I 21（C期）堅穴住居跡 (0.43～0.46)	0.37～0.54 (0.43～0.46)	0.45
多 賀 城 跡	S K 22土壤	0.38～0.52 (0.38～0.45)	0.43
	鴨ノ池第10層出土土器	0.37～0.54 (0.37～0.45)	0.43
S K 2321土壤 第4～7層	0.36～0.49 (0.43～0.49)	0.44	12

（ ）内の数値は、この間でまとまりがあることを表している。

表1 各遺構出土の土師器杯 比較表

器種	分類	A期					B期					C期		合計
		1層	周溝 床面	掘方	小計	合計	1層	周溝	小計	合計	1層	合計		
土師器	杯	B	11		11							24		
		BII										1		
		BV										6		
		不明	12		12		4		4			35		
	甕	B	17		1	18	64		1	1		13		
		不明	42	4	46		18	2	20		21	69	82	167
	高台付杯	B	2		2	2						1	1	3
須恵器	杯	II			0							1		
		III	2	1	3	18						2		
		V	1		1								11	31
		不明	12		2	14		2		2			10	
	甕	-	5		5	5	1		1	1		20	20	26
	瓶	-	1		1	1		1	1	1		2	2	4
丸瓦	-	2		2	2	1		1	1					3
平瓦	-											1	1	1
製塙土器	-	3		3	3							5	5	8
合計		110	5	3	118	26	4			30		188	336	

表2 S 121 積穴住居跡 出土遺物集計表

類が1点、BV類が6点出土している。口径/底径比についてみると、0.37～0.54である。底部ヘラミガキの方向は、放射状が4点ある。

S K22土壤は、埋土を4層に分けており、総数で85点の遺物が出土している（表3）。そのうち1層と4層が接合している土師器杯（第20図1・5）があり、埋没までに大きな時間差はないと考えられることから、一括して検討する。出土遺物には土師器杯・甕・須恵器杯・甕・長頸瓶が出土しており、須恵土器はない。土師器はすべてB類である。土師器と須恵器の構成比率は、土師器87%、須恵器13%であり、土師器の占める割合が多い。土師器杯をみると、切り離しが確認できるものはすべてBV類である。口径/底径比についてみると0.38～0.52である。底部内面のヘラミガキ方向は、確認できるもの

器種	分類	1層	2層	3層	4層	小計	合計
土師器	杯	B	21	1	9	1	32
		BV	2				2
		不明	5				5
須恵器	甕	B	11		2	13	
		不明	18		4	22	35
須恵器	杯	不明	2	1	1		4
	甕	-	6				6
	長頸瓶	-	1				1
合計			66	2	16	1	85

表3 S K22 土壤 出土遺物集計表

(注1) A・B期について、周溝や床面など遺構に伴うものは全て破片で、点数もA期が5点、B期が4点と少ないことから、堆積層を含めて算出した。

はすべて放射状である。

以上、S I 21（C期）竪穴住居跡とSK22土壤の出土土器をみると、土師器は全てB類であり、土師器のA類や須恵系土器は確認できないことから、およそ8世紀後葉～9世紀代におさまるものと考えられる。さらに、土師器について詳細にみていくと、杯は底径/口径比が0.5未満のものが主体を占めていることと、土師器が須恵器に比べて8割前後を占めるほど多く出土していることが指摘できる。以上のことは、9世紀後半頃とされる鴻の池10層や多賀城跡SK2321土壤4～7層出土土器の特徴と類似している。したがって、S I 21（C期）竪穴住居跡、SK22土壤もこの頃とほぼ同じ年代を推定される。

次にS I 19・20（C期）竪穴住居跡について検討する。S I 20（C期）竪穴住居跡から出土している土師器は全てB類であり、杯ではB II類が1層から1点、BV類がカマド内埋土から2点、1層から2点出土している。全体の形がわかる土師器杯（BV類）2点をみると、底径/口径比は0.41と0.43で、底部ヘラミガキの方向は放射状である。以上のことは、前述したS I 21（C期）竪穴住居跡およびSK22土壤出土土器と近似していることから、およそ9世紀後半頃と考えられる。

S I 19竪穴住居跡は、重複関係からS I 21竪穴住居跡よりも新しいことから、これが年代の上限と考えられる。出土遺物についてみると、須恵系土器は出土しておらず、このことを考慮するとおよそ9世紀後半頃におさまるものと考えられる。

## ②Ⅲ層上面検出遺構群

S B14・31掘立柱建物跡、SA15柱列跡、SD16・17溝跡、SX18を発見しているが、出土した遺物はいずれも破片で全体の形がわかるものはない。SB31掘立柱建物跡の柱抜き取り穴から土師器甕（B類）、SX18不明遺構の1層から土師器杯（B類）・甕（B類）が出土している。市川橋遺跡SX1351河川跡の調査（参考文献2）では、土師器のB類は8世紀後葉頃から出現することから、これが上限と考えられる。また、前述したII層上面検出遺構はいずれも9世紀後半であり、これを下限とした年代が想定できることから、III層上面検出遺構は8世紀後葉～9世紀後半の間におさまるものと考えておきたい。

## ③Ⅲ層出土土器

出土した総点数は60点のうち、出土層の内訳はIII 1層で7点、III 2層で53点である。また、SK26土壤からも、本来III層に属すると見られる須恵器蓋が出土しており（第22図）、これを補足的に扱う。種類別にみると須恵器が54点、土師器が6点と須恵器が多数を占める。土師器については、すべて小片で摩滅しているため、器形や調整技法などは不明である。須恵器については、甕が46点、蓋が8点出土している。甕はすべて体部であり、また文様などの特徴を確認できるものなどはなかった。このうち蓋の器形や口縁部の特徴は、北側に近接する高崎古墳群第11次調査SR32窯跡出土のものと近似している（註2）。SR32窯跡から出土した須恵器蓋は厚手のもの（蓋A）と薄手のもの（蓋B）に分類しており、今回出土したもののうち、体部から口縁部までの厚さが6～9mmのもの（第4図1～4・6～8、第22図）は、おおむね蓋Bに類似している（註3）。SR32窯跡出土土器群の年代は、6世紀末～7世紀第1四半期と考えられることから、III層出土土器もこれと同じ年代と考えられる（参考文献6）。

（註2）III層は、炭化物を含んでいることや、焼き台と融着した蓋（第4図4）が出土していることから、SR32窯跡の灰原の可能性が考えられる。その際、出土した少量の土師器は、III層より古い遺構から混入した可能性などが考えられる。

（註3）第4図5については、口縁端部形状から、蓋と考えた。

## (2) 方格地割との関係について

今回の調査では、**III層上面で8世紀後葉～9世紀後半の掘立柱建物跡と**II層上面で9世紀後半の堅穴住居跡を発見した。一方、同時期における本調査区西側隣接地では、多賀城南面に施工された方格地割がおよんでおり、また地割を構成する道路である東西大路東道路は、本遺跡の北側を通過している可能性が高いと考えられている（第1図）。このように方格地割と本調査区は極めて近接していることから、ここでは方格地割との関係について考えてみたい。まずは年代の対応関係について周辺の調査とあわせて整理する。方格地割は8世紀後葉から10世紀にかけて、4時期の変遷（I→IV期）を想定している（参考文献10・11）。これにあてはめると本調査区で発見した**III層上面検出遺構群は方格地割I～III期のいずれかにあたり、**II層上面検出遺構は方格地割III期にそれぞれ相当すると考えられる。また、南側に隣接する第10次調査区（第2図）では、方格地割I～II期にかけて堅穴住居が位置をややかえて3軒つくられていたことを確認している。北側に隣接する第11次調査区（第2図）では、方格地割III期にあたる規模の大きな溝跡を発見している。しかし、いずれの調査区でも方格地割IV期にあたる遺構・遺物は発見されていないため、この頃には土地の利用がなされなくなったものと考えられる。********

次に遺構の構成について比較する。方格地割内は掘立柱建物が多く、堅穴住居は極めて少数である。一方、本調査とその周辺では方格地割I～III期いずれかにあたる掘立柱建物跡を2棟発見しているほか、6軒もの堅穴住居が方格地割I～III期の長期にわたりつくられている。同様のあり方は、北東側の丘陵部に隣接する高崎遺跡第10次調査でみられ、ここでは8世紀末～10世紀にかけて、堅穴住居跡と掘立柱建物跡からなる集落を発見している。以上のことから、本調査区とその周辺は、方格地割内とは異なり、北東側丘陵部で発見した堅穴住居を主体とする集落の一部と考えられる。

## 4 まとめ

- (1) **II層上面で、掘立柱建物跡、土壙、溝跡を、**III層上面で掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡などを発見した。また、**III層からは古墳時代後期の須恵器が出土した。******
- (2) **II層上面検出遺構群の年代は9世紀後半、**III層上面検出遺構群の年代は8世紀後葉～9世紀後半と考えられる。****
- (3) **II層上面検出遺構群は、方格地割III期に相当すると考えられる。方格地割りIV期になると土地の利用がなれなくなっていると考えられる。**
- (4) **III層から出土した須恵器は、北側隣接地で調査したSR32窯跡で焼かれたものと考えられ、年代はこれと同じ6世紀末～7世紀第1四半期頃と考えられる。**

## 参考文献

- 1 多賀城市教育委員会『高崎遺跡－都市計画道路高崎大代線外1線建設工事関連発掘調査報告書II－』多賀城市文化財調査報告書第12集 1987
- 2 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II－』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
- 3 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡1－平成18年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第90集 2008
- 4 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡1－平成19年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第96集 2009
- 5 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成21年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第99集 2010
- 6 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成22年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第103集 2011
- 7 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992
- 8 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1995』1996
- 9 宮城県教育委員会『角山遺跡・山居遺跡－三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書VI－』宮城県文化財調査報告書第206集 2006
- 10 鈴木孝行「多賀城外の方格地割」『第32回 古代城柵官衙道路検討会－資料集－』古代城柵官衙道路検討会 2006
- 11 鈴木孝行「多賀城方格地割の調査」『月刊 古考古学ジャーナル9月号 特集 多賀城発掘50年』ニューサイエンス社 2010
- 12 千葉孝弥「多賀城周辺の古代道」『月刊 文化財 5月号 (560号)』第一法規 2010



1 調査区全景（西から）



2 S I 21 竪穴住居跡 掘出状況（北東から）



3 S I 21 竪穴住居跡（北東から）



4 S I 19・20 竪穴住居跡（南西から）

写真図版 1



1 S I 19 壺穴住居跡 カマド（南西から）



2 S I 21 壺穴住居跡、SK 22 土壌（南西から）



3 S I 20 (C期) 壺穴住居跡出土土器 (第15図)



4 土師器杯 (S I 20 (C期) 壺穴住居跡 R 7  
第15図 3)



1 S I 21(C期)堅穴住居跡 出土遺物 (第19図)



2 土師器杯(S I 21(C期)堅穴住居跡 R 14  
第19図5)



3 土師器杯(S I 21(C期)堅穴住居跡 R 5  
第19図1)



4 SK 22土壤出土遺物 (第20図)



5 土師器杯(S K22土壤 R 13 第20図1)

写真図版3



1 III層出土 須恵器蓋（第4図）



2 須恵器蓋（III 2層 R25 第4図4）



3 須恵器蓋（III 2層 R25 第4図4）



4 須恵器蓋（III 2層 R 1 第4図1）

### III 小沢原遺跡第15次調査

#### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、共同住宅新築工事に伴うものである。平成21年6月24日に地権者より当該地における共同住宅新築工事計画と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径60cm、長さ5.0mの杭を77本打ち込むこと、また、擁壁設置に伴い深さ約1.4mの掘削等を行うことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。その後、平成21年7月14日に地権者より調査の依頼を受け、当該地の確認調査を実施した(第13次調査)。その結果、現地表面下約40cmで埋蔵文化財の存在を確認したことから、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外では建物を支える十分な強度が得られないことから、記録保存のための第15次調査として実施したものである。

調査は4月9日から開始した。重機を使用して、第I層(盛土)を除去し、掘削土は広く後世の搅乱が認められた調査区南側と西側に積み上げた。13日より作業員を動員し、遺構検出作業を行った。その結果、西半部でS B63掘立柱建物跡やS K64土壙を発見した。また、東半部ではほぼ並行して南北方向に延びるS D65・66溝跡を発見した。16日、平面図作成のための3m×3m基準点の設定を行った。遺構の新旧関係を検討しながら掘り下げを行ない、順次終了したものから平面・断面図を作成する。これらの調査が概ね終了した24日に、調査区内の全景写真を撮影する。29日、土層の注記や図面の補正等を行った後、発掘器材を撤収し全ての調査を終了した。

#### 2 調査成果

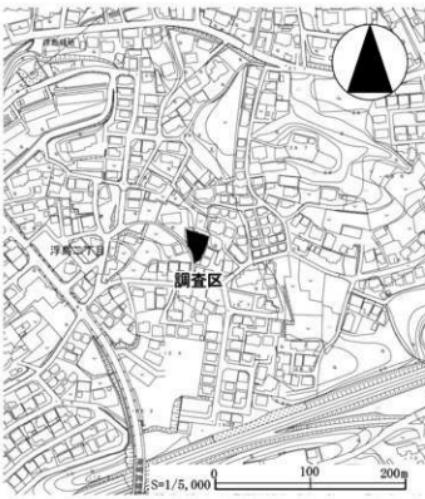
##### (1) 地形と基本層序

本調査区の地形は、北東から東西に向かって低くなる傾斜地である。この傾斜地で北東から南西に向うS X67・68沢跡を確認した。

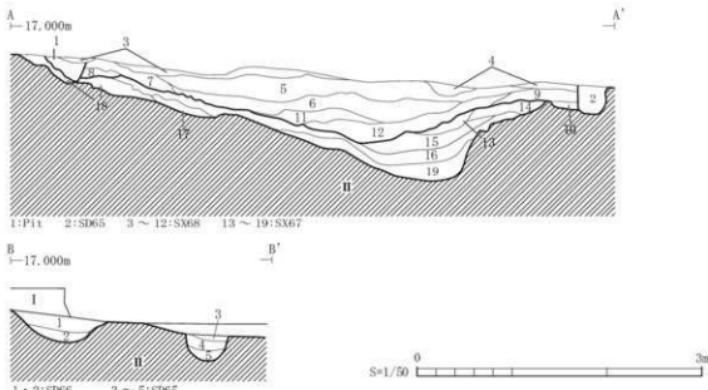
層序については、I層(盛土)を除去すると、直ちに遺構検出面となる。

##### (2) 発見した遺構と遺物

今回の調査では掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、土壙1基と沢跡を発見した。



第1図 調査区位置図



第2図 SD 65・66 溝跡、SX 67・68 沢跡 断面図

#### S B63掘立柱建物跡（第3・4図）

調査区西半部で発見した桁行2間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。SK64と重複しているが直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。柱穴は8個すべてを検出し(P1~8)、P3・4で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した(註)。建物の方向は西側柱列で見ると、発掘基準線に対し北で34度51分東に偏している。規模は桁行が西側柱列で総長4.75m、柱間は北から2.31m、2.44m、梁行は北妻で総長3.56m、柱間は西から1.73m、1.83mである。柱穴はおよそ方形であり、規模は長辺56~80cm、短辺48~78cm、深さ23~73cmである。この内P2・4・5・7では、掘り方の一部に段掘りが認められる。埋土はP2でみると4層に分けられる。1層が灰オリーブ砂質土、2層が灰色砂質土、3層がオリーブ黒色砂質土、4層が暗オリーブ灰色粘質土であり、このうち1層には地山ブロックや炭化物が混入している。柱痕跡は直径20cm前後の円形もしくは楕円形であり、埋土は灰色粘土である。

遺物は土師器杯(BV類)、須恵器甕が出土している。

#### SD 65溝跡（第2・3図）

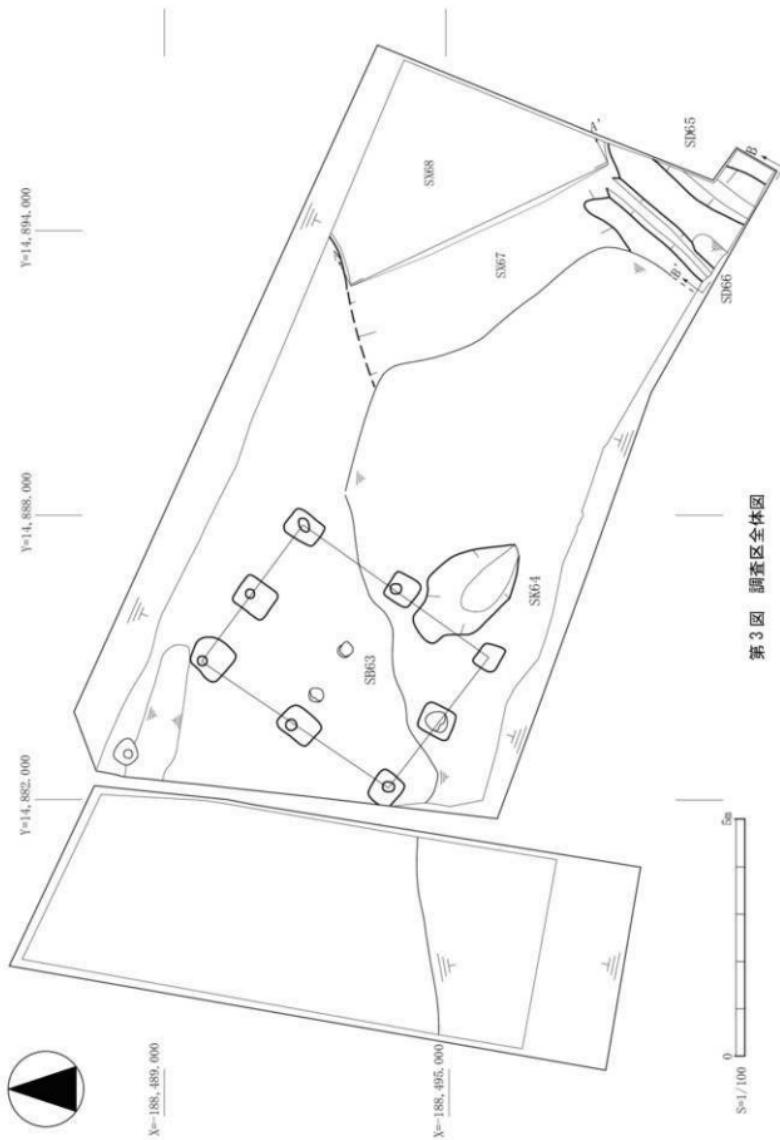
調査区南東壁際の地山上で発見した南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。方向は、北で約31度東に偏している。規模は長さ2.4m以上、上幅約1m、深さ25cm前後である。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は黒褐色土を斑状に含んだ褐色土で、2層は粘性のある褐灰色土である。遺物は出土していない。

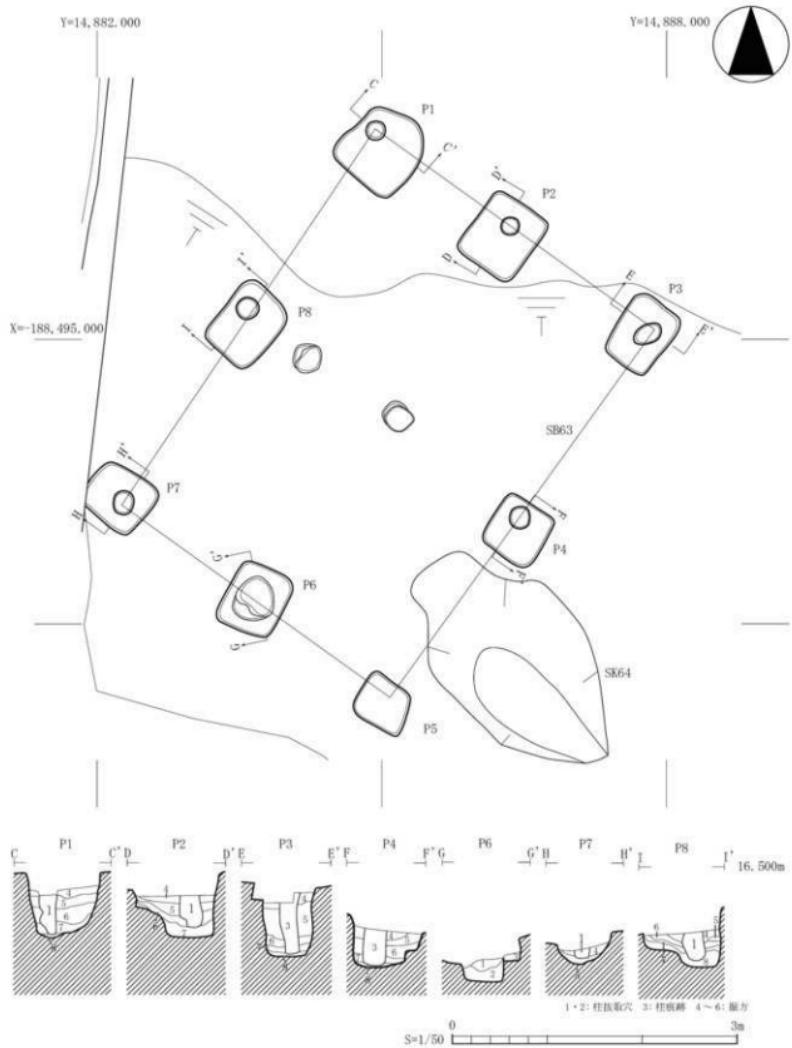
#### SD 66溝跡（第3図）

調査区南東の地山上で発見した南北方向の溝跡であり、およそSD 65と並行している。南は調査区外に延びている。SX 68と重複しており、これより新しい。規模は長さ3.5m以上、上幅約45cm、深さ約

(註:P1・2については断面の形状、P7・8については埋土中に地山ブロックが多く混入していることから、これらについては柱のあたり痕跡がある抜取り穴と判断した。)

第3図 調査区全体図





第4図 SB63 堀立柱建物跡 平面図・断面図

28cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に分けられる。1・3層はいずれもにぶい褐色砂質土で、2層は明褐色砂質土である。遺物は出土していない。

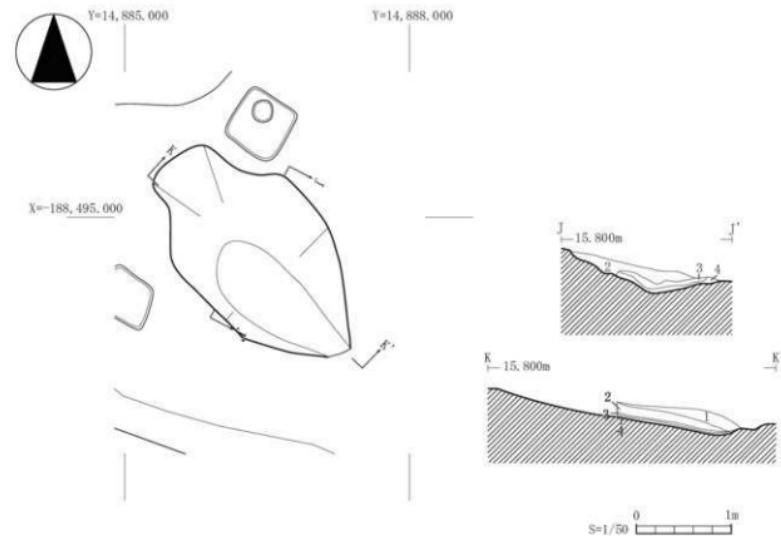
#### S K64土壤 (第3・4・5・6図)

調査区西側で発見した土壤である。S B63と重複しているが直接の切り合はないため新旧関係は不明である。平面形は東西に長い不整形であり、規模は東西約2.7m、南北約0.7m、深さ24cmである。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層に分けられる。1・2層が灰色土、3層が炭化物層、4層がオリーブ灰色砂質土であり、1・2層には炭化物が斑状に多く混入している。

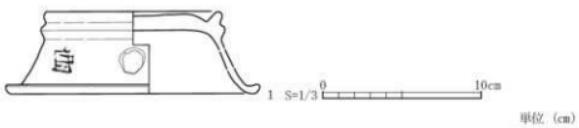
遺物は土師器杯（B III類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、瓶・円面鏡（第6図）が出土している。

#### S X67沢跡 (第2・3図)

調査区北東部で発見した北東から南西に向かって傾斜する沢跡である。S X68と重複しており、これより古い。規模は上幅約5.5m、深さ60cmである。埋土は8層に分けられる（第2図11～17）。1層が



第5図 SK64 土壤 平面図・断面図



第6図 SK64 土壤出土遺物

番号	種類	層位	特徴		碗部径 残存率	圓足径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 円面鏡	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	(15.4) 12/24	(10.6) 10/24	4.9	2-1	R1	2箇所に円形透かし 脚部墨書「□」

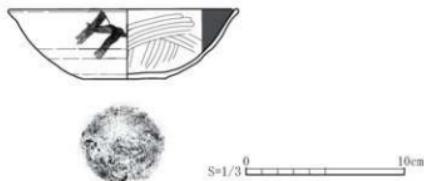
灰黄色粘土、2層が黄褐色粘土、3層が灰色粘土、4・5層が黒褐色粘土、6層が灰オリーブ砂質土、7層がにぶい黄褐色土である。このうち、1層には細かい砂が多量に混入しており、3層には粗砂が層状に認められる。また、8層には地山ブロックや砂が多量に混入している。

遺物は、土師器杯（B V類）が出土している。

#### S X 68沢跡（第2・3・7図）

S X 67とおよそ同じ範囲で発見した沢跡である。S D66、S X 67と重複し、S D66より古く、S X 67よりも新しい。規模は上幅6～10m、深さ60cmであり、埋土は8層に分けられる（第2図3～10）。1・6層がにぶい黄褐色土、2・4・5層が黄褐色砂質土、3・7・8層が灰オリーブ粘土である。また、最下層には、灰白色火山灰の自然堆積が確認された。

遺物は、土師器杯（B V類）（第7図）・甕（B類）、須恵器杯・甕・瓶が出土している。



番号	種類	特徴		口径 外径	底径 内面	残存率 底径	器高	写真 図版	登録 番号	備考	単位(cm)
		外面	内面								
1	土師器・杯	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ、黒色処理	(14.1) 4/24	5.2 24/24	4.4	2-2	R2	BV類	墨書き「□」	

第7図 S X 68沢跡出土遺物

### 3まとめ

今回の調査では、S B63掘立柱建物跡、S D65・66溝跡、S K64土壤、S X67・68沢跡を発見した。これらは重複関係より、S X67→S X68→S D65の新旧関係を確認している。これら構造の内、S X68については最下層に灰白色火山灰が自然堆積していることから、10世紀前葉以降に埋没したことが明らかである。また、S D65の年代については、S X68との新旧関係から10世紀前葉以降である。

S B63、S K64、S X67出土遺物をみると、S B63から土師器杯（B V類）、S K64から土師器杯（B III類）・甕（B類）、S X67から土師器杯（B V類）があり、須恵器系土器は確認できないことから、8世紀後葉～9世紀代の年代が与えられよう。



S B 63 挖立柱建物跡・S K 64 土壙（南から）



S B 63 挖立柱建物跡 Pit3 断面（東から）



S B 63 挖立柱建物跡 Pit4 断面（東から）

写真図版 1



調査区東側 SD 65・66 溝跡検出状況（南から）



S X 67・68 沢跡土層堆積状況（東から）



1: SK 64 土壙出土 円面硯（第6図 1）



2: S X 68 沢跡出土 土師器杯（第7図 1）

写真図版 2

## IV 山王遺跡第83次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成工事に伴うものである。平成22年6月20日に地権者より当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財の係わりについての協議書が提出された。計画内容は次のとおりである。5区画のメゾネット及び借家新築工事に伴い、西側の農道を拡幅して、幅約5m、長さ約76mの専用道路を布設する。また、宅地の西側1,120m<sup>2</sup>の範囲に約50cmの盛土を施し、南側の擁壁設置工事では最深約1.7m、給排水工事でも最深約2.2mの掘削を行うというものであった。この計画の内容では、埋蔵文化財への影響が懸念されることから工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、記録作成のための本調査を実施したうえで、計画を進みたいとの地権者の意向から申請どおりの工法で着手することに決定した。その後、平成22年7月1日に地権者より発掘調査の依頼・承諾書の提出を受け、第83次調査として実施した。

調査は擁壁設置場所を1区、道路部分を2区、農道拡幅部分を3区とした（第2図）。7月27日から重機を使用して、1区から順次掘削を行った。8月3日より作業員を動員して1・2区の遺構検出作業に入り、溝跡や小溝群を見つける。5日からはこれらの新旧関係を検討後、埋土の掘り下げを開始した。17日、平面図作成のための3m×3mの基準点を設定する。同時に、平面・断面図を作成し、31日に両調査区の全景写真を撮影する。9月2日、調査区内の土層断面図の作成と土層の注記を行い、両区の調査を終了する。3区については10月1日から調査に着手した。5日より遺構の検出作業を行い、土壌・溝跡を見つける。13日から各遺構埋土の掘り込みを行い、同時に平面・断面図を作成した。16日には全景写真撮影を行い、この面での調査を終了する。19日より下層の遺構確認のため、重機によって堆積層を掘り下げた。21日、明黄褐色粘土層（IV層）上面で南北方向の畦畔を見ついたことから、重機による掘削を終了し人力での検出作業に切り替わった。26日には平面・土層断面図を作成して、翌日全景写真撮影と土層注記を行った。その後、水田層と捉えた第V層について3ヶ所で土壤採取を行った。31日より、重機を使い埋め戻し作業を行い、現地調査を終了した。

### 2 調査成果

#### 【1区】

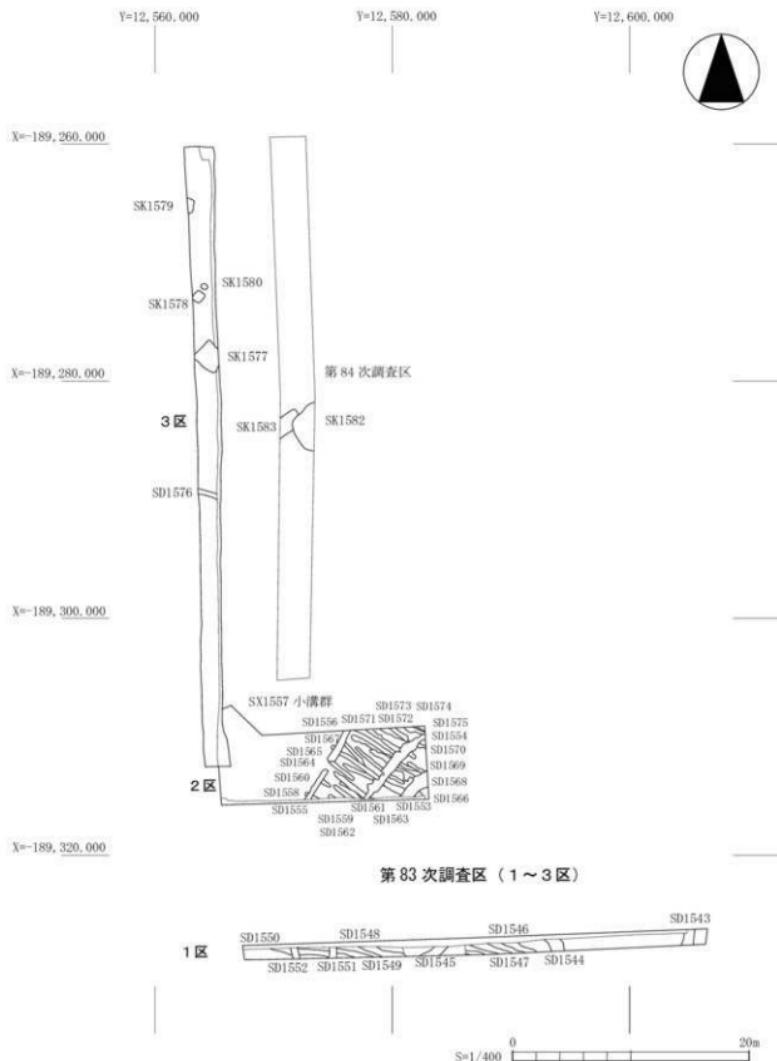
##### (1) 層序（第3図）

I層 現代の盛土である。厚さは約0.7～1.1mである。

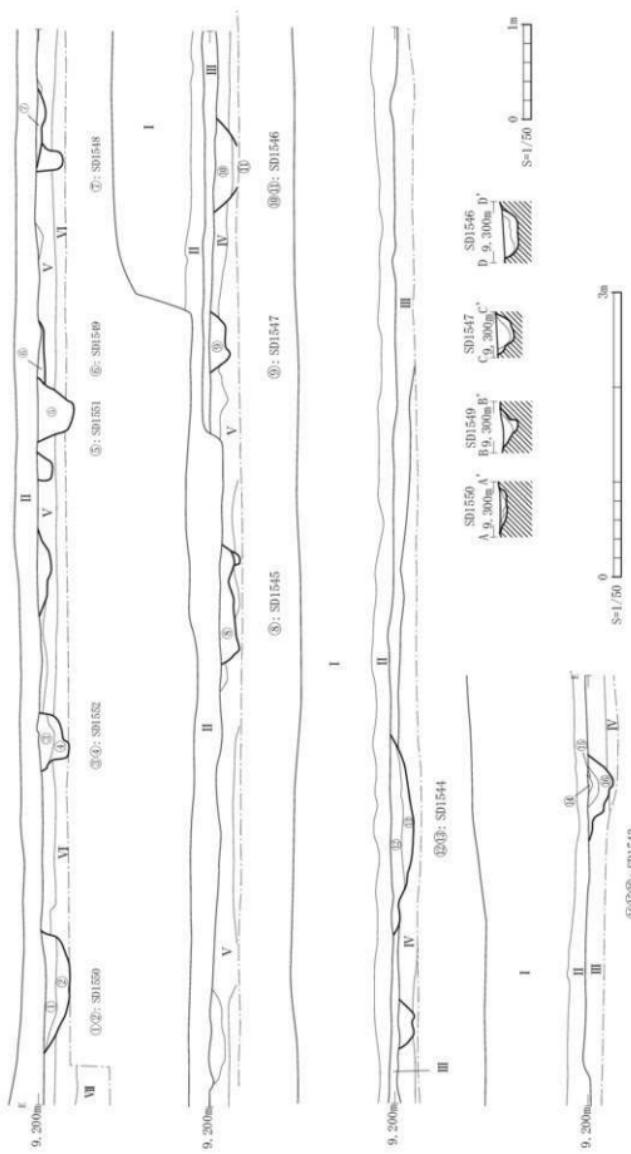
II層 調査区全域に堆積する、酸化鉄を含んだ黒褐色土である。厚さは10～40cmで西側ほど厚く堆



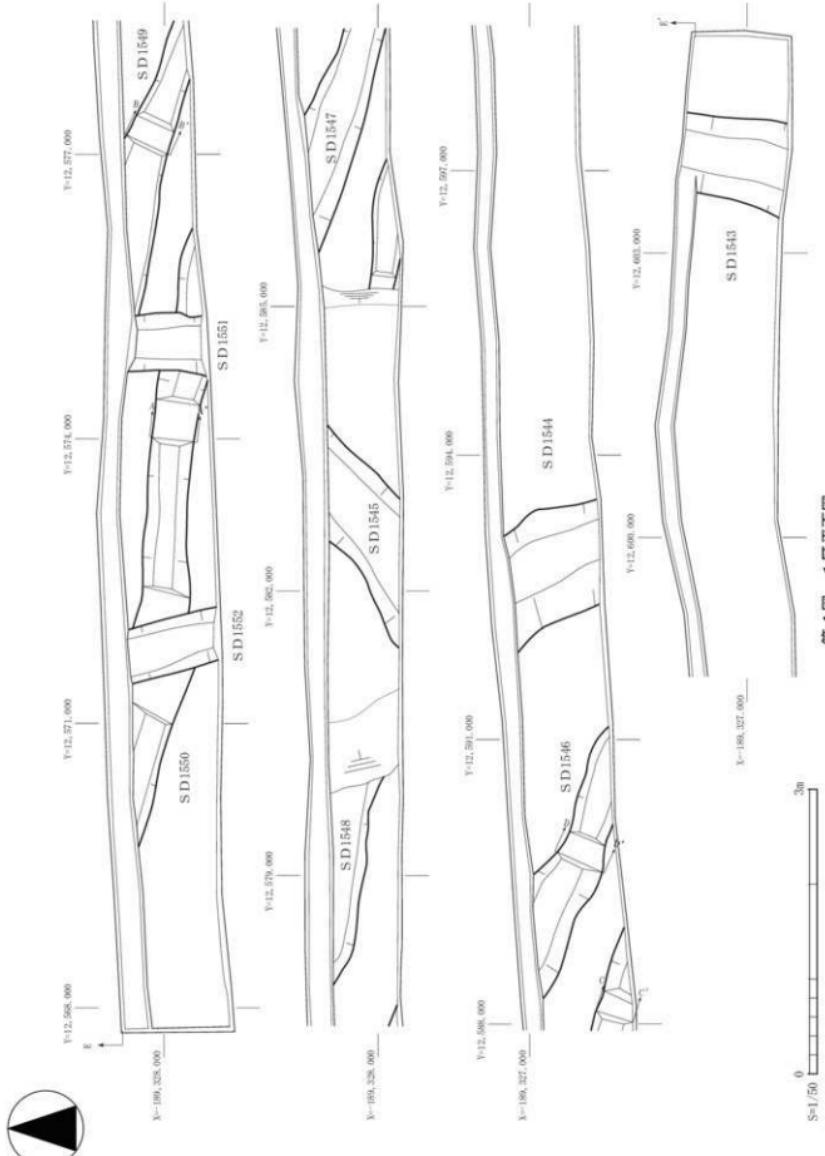
第1図 調査区位置図



第2図 遺構配置図



第3図 1区層序（調査区北壁面）及び溝跡断面図



第4図 1区平面図

積している。

- III層 調査区東側に堆積する、酸化鉄を含んだにぶい黄褐色粘土である。厚さは7~16cmである。  
S D1543・1544溝跡の検出面になっている。
- IV層 調査区東側に堆積する、にぶい黄褐色砂質土である。厚さは8~25cmである。S D1546・  
1547溝跡の検出面になっている。
- V層 調査区ほぼ全域に堆積する、粒子の細かいにぶい黄褐色土である。厚さは10~20cmである。  
S D1548~1553溝跡の検出面になっている。西側ではIII・IV層が確認できなかつたため、II  
層が直接覆っている。
- VI層 調査区西側で堆積する、酸化鉄や砂を含んだにぶい黄褐色土である。厚さは10~20cmである。
- VII層 調査区西隅で確認した黒色粘土である。3区で確認した水田層（V層）に対応する。

## (2) 発見した遺構・遺物

### S D1543溝跡（第2・3・4図）

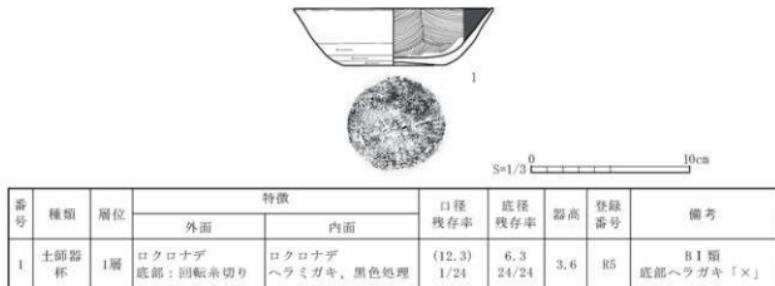
調査区東隅のIII層上面で発見した南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。方向はおよそ南北の発掘基準線に沿っている。規模は長さ1.2m以上、上幅80~90cm、深さ25cmである。底面は丸味を帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分けられる。1層は酸化鉄や砂を含む黒褐色土、2・  
3層は灰白色火山灰をブロック及び粒子を含んだにぶい黄褐色土、褐灰色粘土である。

遺物は土師器杯・甕（B類）が出土している。

### S D1544溝跡（第2・3・4・5図）

調査区中央部東側のIII層上面で発見した、南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。方  
向は、北で約29度西に偏している。規模は長さ1.3m以上、上幅1.05~1.15m、深さ25cmである。底面  
は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は酸化鉄・砂を含んだ黒褐色  
粘土、2層は砂を主体としたにぶい黄褐色土である。

遺物は土師器杯（B I類）（第5図）・甕（B類）、須恵器杯（IV類）が出土している。



第5図 SD1544 溝跡出土遺物

#### S D 1545溝跡（第2・4図）

調査区中央部東側のV層上面で発見した、南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。方向は、北で約45度東に偏している。規模は長さ1m以上、上幅80～90cm、深さ約20cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土・砂・酸化鉄を含んだ黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

#### S D 1546溝跡（第2・4図）

調査区中央部のIV層上面で発見した、東西方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。方向は西で約28度北に偏している。規模は長さ2.4m以上、上幅40～60cm、深さ約30cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。いずれも地山ブロックや砂を含んだ灰黄褐色土で、2層ほどしまりが強い。遺物は出土していない。

#### S D 1547溝跡（第2・4図）

調査区中央部のIV層上面で発見した、東西方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。方向は西で約18度北に偏している。規模は長さ2.9m以上、上幅40～60cm、深さ25cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。いずれも地山ブロックや砂を含んだ灰黄褐色土で、2層ほどしまりが強い。遺物は出土していない。

#### S D 1548溝跡（第2・4図）

調査区中央部西側のV層上面で発見した、東西方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。方向はおよそ東西の発掘基準線に沿っている。規模は長さ約8.5mで、上幅25～30cm、深さ約10cmである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。

#### S D 1549溝跡（第2・4図）

調査区東側のV層上面で発見した、南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。S D 1551と重複し、これより古い。方向は西で約18度北に偏している。規模は長さ2.8m以上、上幅35～40cm、深さ8cmである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は酸化鉄を含んだ灰黄褐色粘土、2層はにぶい黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

#### S D 1550溝跡（第2・4図）

調査区西側のV層上面で発見した、東西方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。S D 1551・1552と重複し、これらより古い。方向は西で北に約7度偏している。規模は長さ6m以上、上幅45cm、深さ15cmである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は酸化鉄を含んだ灰黄褐色粘土、2層はにぶい黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

#### S D 1551溝跡（第2・4図）

調査区西側のV層上面で発見した、南北方向の溝跡である。溝の両端は調査区外に延びている。S D 1552と重複し、これより新しい。方向はおよそ南北の発掘基準線に沿っている。規模は長さ1.1m以上、上幅約60cm、深さ35cmである。底面は丸味を帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。いずれもにぶい黄褐色土を主体とするもので、1層には砂や地山ブロック、2層は灰白色火山灰や地山ブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

#### S D 1552溝跡（第2・4図）

調査区西壁際のV層上面で発見した南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。S D 1551と重複し、これより新しい。方向はおよそ発掘基準線に沿っている。規模は長さ1.2m以上、上幅60cm、

深さ約30cmである。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。いずれもにぶい黄褐色土を主体とするもので、1層には砂や地山ブロック、2層は灰白色火山灰や地山ブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

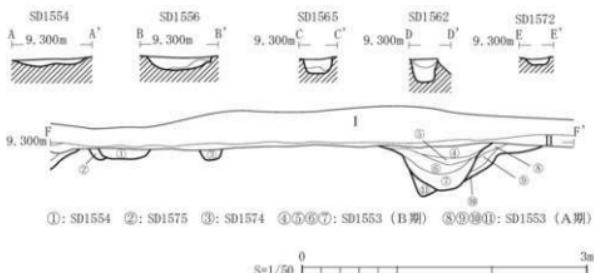
## 【2区】

### (1) 層序

I層 調査区内ほぼ全域に堆積する、盛土である。厚さは20～40cmである。

II層 調査区全域に堆積する、黒褐色土である。厚さは3～13cm。

III層 調査区全域に堆積する、黄褐色土粘土である。S D1553～56とS X1556小溝群の遺構検出面になっている。



第6図 2区層序（調査区東壁）及び溝跡断面図

### (2) 発見した遺構と遺物

#### S D1553溝跡（第2・7図）

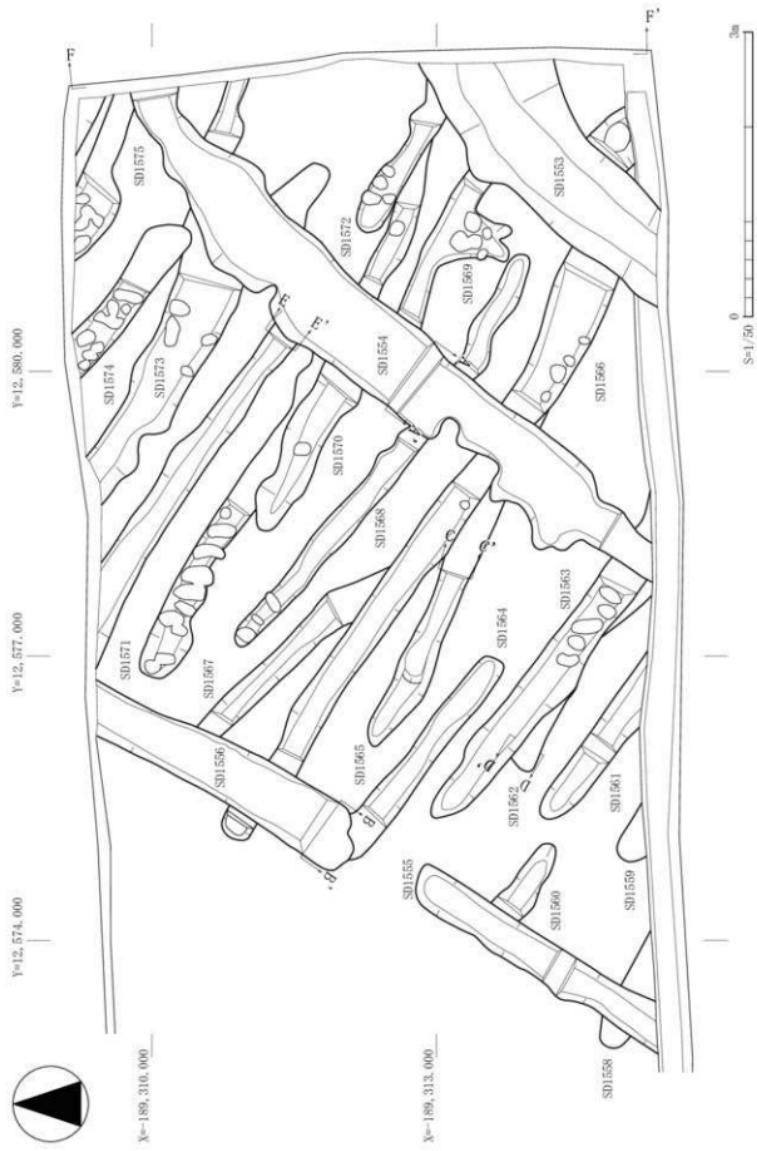
調査区南東隅のIII層上面で発見した南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。S X1556小溝群と重複し、これらより新しい。方向は、北で約46度東へ偏している。2時期（A→B）の変遷を確認できた。長さは3m以上で、A期の上幅45cm以上、深さ55cmで、B期の上幅0.8～1.1m、深さ約50cmである。両期とも溝の底面は丸みを帯び、A期の南壁は緩やかに立ち上がり、北壁は垂直に立ち上がる。B期の壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土はA期の1～3層は砂や酸化鉄を含む灰黄褐色、4層はしまりの強い褐色灰色粘土である。B期の5～7層は砂を含んだ黑色及び黒褐色土を主体とする粘土層で、8層は砂や酸化鉄を含んだ褐色灰色粘土である。遺物は出土していない。

#### S D1554溝跡（第2・7図）

調査区東半部のIII層上面で発見した、南北方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。S X1557小溝群と重複し、これらより新しい。方向は北で約48度東へ偏している。規模は長さ8m以上、上幅32～91cm、深さ5～8cmである。溝の底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山ブロックや灰白色火山灰粒子を含んだ黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

#### S D1555溝跡（第2・7図）

調査区中央部南側のIII層上面で発見した南北方向の溝跡であり、南は調査区外に延びている。方向は北で約30度東へ偏している。S X1557小溝群と重複し、これらより新しい。長さは3m以上で、規模は



第7図 2区構平面図

上幅約35～40cm、深さ15cmである。溝の底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は酸化鉄や砂を含んだ黒褐色粘土、2層はしまりのある灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

#### S D1556溝跡（第2・7図）

調査区中央部東側のⅢ層上面で発見した、南北方向の溝跡である。北は調査区外に延びる。方向は北で約31度東へ偏している。S X1557小溝群と重複し、これらより新しい。長さは3.1m以上で、規模は上幅50～62cm、深さ12cmである。溝の底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は酸化鉄や砂を含んだ黒褐色粘土、2層はしまりのある灰黄褐色土である。

なお、S D1555とは、方向・埋土等の状況が類似することから、同一溝の可能性が高い。遺物は出土していない。

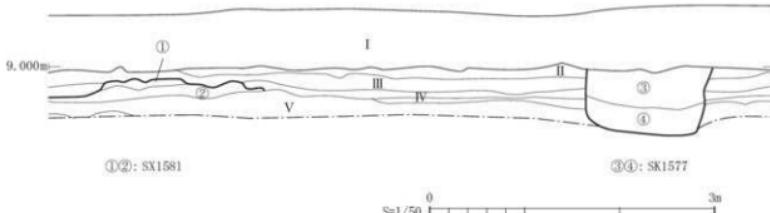
#### S X1557小溝群（S D1558～S D1575）（第2・7図）

調査区東半部のⅢ層上面で発見した、東西方向の小溝群である。方向は北で約20～40度東へ偏している。S D1553～1556と重複し、これらより古い。また、小溝の中でも新旧関係を確認している。確認できた規模は長さ約0.8～6m以上で、規模は上幅18～60cm、深さ5～25cmである。小溝の底面は平坦のものと丸味を帯びるものとがあり、壁も緩やかに立ち上がるものとほぼ垂直に立ち上がるものがある。これらの中には、S D1559のように張り出しのあるものや、S D1563・1566、S D1569～S D1575のように壁や底面に掘削痕を確認できたものもある。埋土は単層のもの、2層に分けられるものとがあり、単層は黒褐色土を主体とし砂や酸化鉄、地山ブロックを含むもので、2層に分けられるものは、上層は酸化鉄や砂を含んだ黒褐色粘土、下層は灰黄褐色土で、しまりや粒子の粗いもの、砂を主体とするものもある。遺物は出土していない。

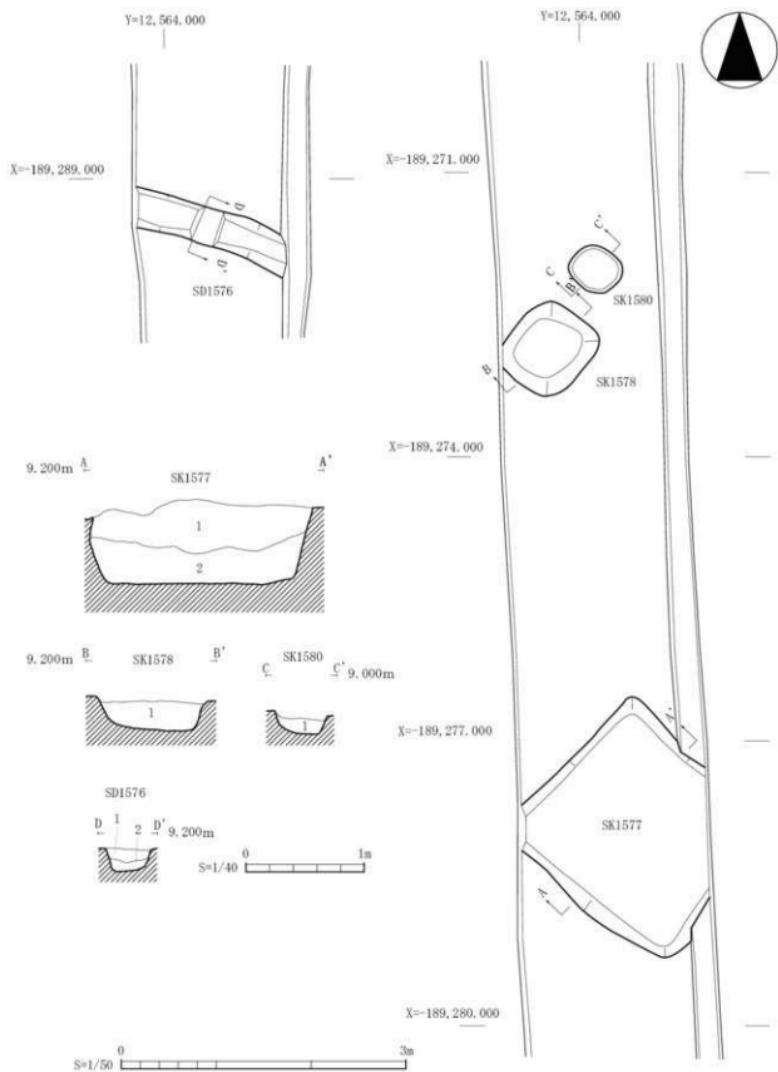
### 【3区】

#### (1) 層序

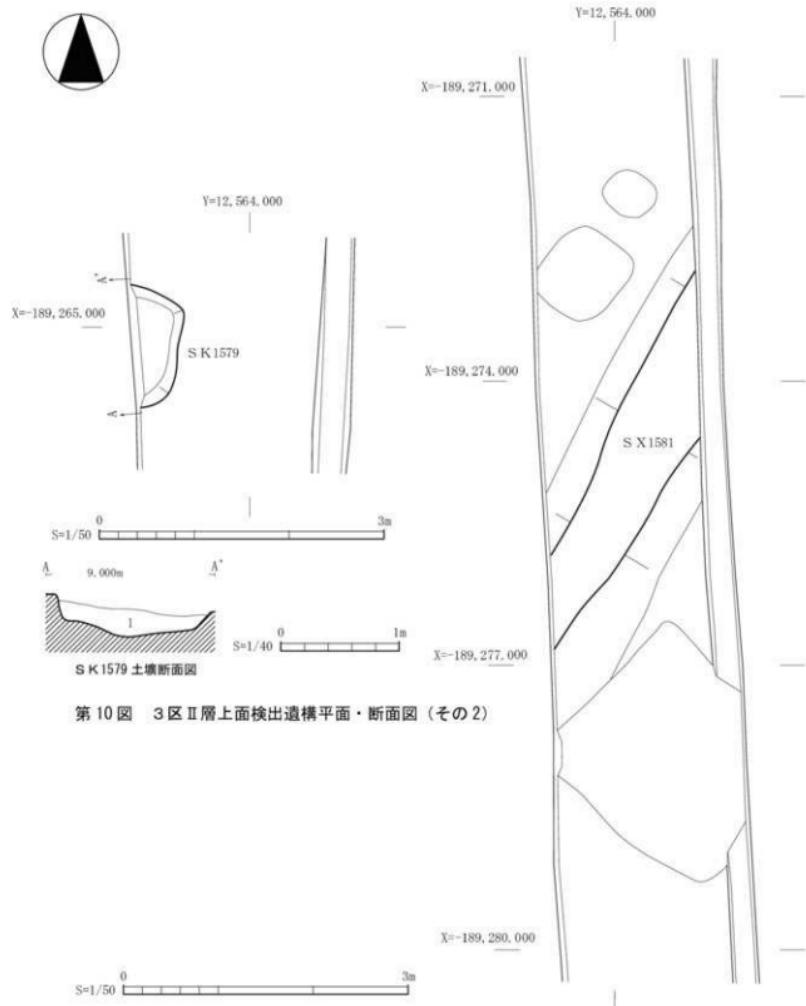
- I層 一部盛土されているが、調査区全域に堆積する黒色土と黒褐色土。厚さは50～70cmである。
- II層 調査区北側に堆積している明黄褐色粘土。厚さは3～17cmである。S D1576溝跡、S K1577～1580土壤の検出面になっている。
- III層 粘性のある黄褐色砂質土で、厚さは6～16cmである。
- IV層 III層に類似した明黄褐色粘土で、厚さは6～20cmである。
- V層 調査区の全域で確認した黒色粘土で、古墳時代の水田層である。1区で確認したVII層に対応する。



第8図 3区層序（調査区東壁面）



第9図 3区Ⅱ層上面発見遺構平面図（その1）



第10図 3区II層上面検出遺構平面・断面図(その2)

第11図 3区V層遺構平面図

## (2) 発見した遺構と遺物

### V層水田跡（第11図）

調査区の全域、南北方向のS X 1581畦畔で発見した。畦畔の両端は調査区外に延びており、方向は北で約33度東へ偏している。規模は長さ3.3m以上、上幅60～90cm、下幅1.5m、高さ15～25cmである。黒褐色土と黄褐色土をブロック状に含んだ黒褐色土を下から順に積み上げて形成している。畦畔に伴う水田の区画は確認できなかった。遺物は出土していない。

なお、プラント・オパールの分析の結果、当該区周辺で稲作が行われていたことが確認された（付章参照）。

### S D 1576溝跡（第2・9図）

調査区中央部南側のII層上面で発見した東西方向の溝跡であり、両端は調査区外に延びている。規模は長さ2m以上、上幅約40cm、深さ約20cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。いずれも黄褐色土で、砂や酸化鉄を含んでいる。遺物は出土していない。

### S K 1577土壤（第2・9図）

調査区中央部北側のII層上面で発見した土壤である。平面形は方形であり、規模は南北約2.2m、東西約2m、深さ約70cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は地山ブロックや灰白色火山灰をブロック状に含んだ黒褐色土、2層は砂や上層をブロック状に含んだ暗灰色粘土である。遺物は出土していない。

### S K 1578土壤（第2・9図）

調査区北側のII層上面で発見した土壤である。平面形は隅丸方形であり、規模は南北約90cm、東西約80cm、深さ25cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は酸化鉄、地山ブロックを含んだ黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

### S K 1579土壤（第2・10図）

調査区北側西壁のII層上面で発見した土壤である。遺構の西側は調査区外に及んでいるため詳細は不明だが、平面形はおよそ梢円形と見られる。規模は南北1.3m、東西60cm以上、深さ30cmである。底面は凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は酸化鉄、地山ブロックを含んだ黒褐色粘土の単層である。遺物は出土していない。

### S K 1580土壤（第2・9図）

調査区北側のII層上面で発見した土壤である。平面形は隅丸方形であり、規模は南北53cm、東西45cm、深さ15cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は酸化鉄、地山ブロックを含んだ黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

## 3 まとめ

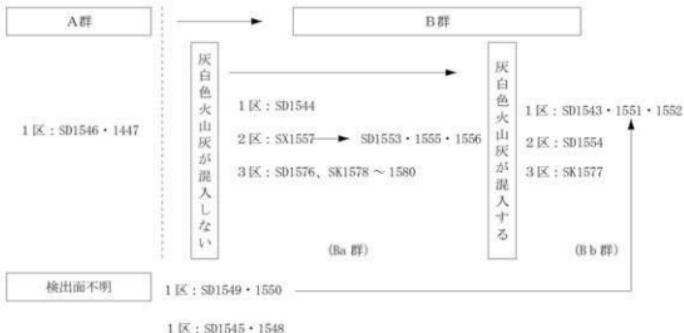
今回の調査では、1～3区で溝跡、土壤、水田跡を発見した。調査区ごとの層序と遺構検出面を整理すると第12図のようになる。

このうち、黒褐色粘土である1区VII層と3区V層は、周辺地区の調査成果から古墳時代前期の水田跡と考えられる（註）。

一方、1区IV層上面で溝跡、1区III層、2区III層・3区II層上面で溝跡・土壤を検出している。前者の遺構群をA群、後者の遺構群をB群とすると、層序の関係からA群→B群の新旧関係が明らかである。また、B群に属する遺構には、灰白灰火山灰が混入するもの（B b群）と、そうでないもの（B a

1区	2区	3区	備考
I層	I層	I層	盛土
II層	II層		旧水田層
III層	III層	II層	遺構検出面B(B群)
IV層		III層	遺構検出面A(A群)
V層		IV層	
VI層			
VII層		V層	古墳時代の水田層

第12図 各調査区の層序対応関係図



第13図 遺構新旧関係模式図

群)がある。B b群に相当するのは1区SD1543・1551・1552、2区SD1554、3区SK1557、B a群に相当するのが1区SD1544、2区SD1553・1555・1556、SX1557小溝群、3区SD1576、SK1578～1580である。これらの重複関係をみると、2区SX1557(B a群)→2区SD1553(B b群)、1区SD1549・1550(B a群)→SD1551・1552(B b群)の関係が確認できることから、B a群→B b群の変遷が推測されよう。

遺構の年代については、B b群が10世紀前葉以降であることが明らかである。B a群では、SD1544から土師器杯(B I類)・甕(B類)が出土していることから、8世紀後葉～9世紀代の年代が与えられよう。出土遺物がない他のB a群についても、概ね同様の年代と捉えておきたい。

A群に属するSD1557・1558については、出土遺物がないため年代については不明であるが、B a群SD1549～1550と方向や埋土が近似していることから、検出面は異なるが、およそそれらと近い年代が想定されよう。

(註) 山王遺跡・新田遺跡の下層の調査において、古墳時代の水田跡を確認している。



1区 調査区全景（東から）



1区 調査区全景（西から）



2区 調査区全景（東から）

写真図版 1



2区 調査区全景（南東から）



2区 SD 1554溝跡 土層堆積状況（西から）



3区 SK 1577 土壌完掘状況（南東から）

写真図版 2



3区 SK 1578・SK 1580 土塙完掘状況（西から）



3区 SX 1581 畦畔（南から）



3区 SX 1581 畦畔断面（西から）

写真図版 3

# 多賀城市山王遺跡第83次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

## 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

山王遺跡第83次調査では、土層断面において畦畔状の高まりが認められ、水田耕作層の可能性が考えられた。そこで、当該層における稲作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を行った。

## 2. 試料

分析試料は、3区S X 1581 畦畔の下に堆積する黒色粘土層（V層）において採取された、上位よりNo.1、No.2、No.3の3点である。試料は、いずれも調査担当者によって採取され当社に送付されたものである。

## 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を  $105^{\circ}\text{C}$  で 24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約  $1\text{ g}$  に対し直径約  $40\text{ }\mu\text{m}$  のガラスピーズを約  $0.02\text{ g}$  添加
- 3) 電気炉灰化法（ $550^{\circ}\text{C} \cdot 6\text{ 時間}$ ）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（ $300\text{W} \cdot 42\text{kHz} \cdot 10\text{ 分間}$ ）による分散
- 5) 沈底法による  $20\text{ }\mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料  $1\text{ g}$ あたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズ個数の比率を乗じて、試料  $1\text{ g}$ 中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-3}\text{g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚  $1\text{ cm}$ あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。

## 4. 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケア科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針も検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1と図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を

記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

No.1～3は、概ね類似するプラント・オパール組成である。イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが各試料から検出され、さらにNo.3とNo.2ではキビ族型が、No.1とNo.2ではネザサ節型がそれぞれ検出された。いずれの試料もイネが高い密度であり優占する。No.1とNo.3ではヨシ属が比較的高い密度であるが、その他の分類群はいずれも少量である。なお、低密度であるがすべての試料で海綿骨針が検出されている。

## 5. 考 察

稻作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、仙台平野では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出された事例が多く報告されていることから、5,000個は一応の目安として、ここでは植物珪酸体の産出状況や遺構の状態をふまえて検討する。

No.1、No.2、No.3の3試料について分析を行った結果、これらすべてからイネが検出された。プラント・オパール密度は、それぞれ6,000個/g、4,800個/g、4,200個/gと高く、稻作跡の判断基準値とされる5,000個/gを超過しているか、それに近い値である。したがって、当該層において稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

イネ以外の分類群では、No.1とNo.2でヨシ属が比較的多い以外は、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、すべての試料でヨシ属が優勢であり、その他の分類群は少量である。このことから、黒色土層の堆積当時の調査地周辺は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稻作が行われていたと推定される。なお、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（メダケ節、ネザサ節）、ササ属（チマキザサ節、ミヤコザサ節）などの竹笹類が生育していたと考えられる。

## 6. まとめ

山王遺跡第83次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討を行った。分析の結果、黒色土層の3試料（No.1、2、3）からイネのプラント・オパールが高い密度で検出され、調査地において稻作が行われていた可能性が高いと判断された。なお、No.1とNo.2でヨシ属が比較的高い密度で検出されており、調査地周辺は湿地もしくはそれに近い環境であったと推定された。

## 文 献

- 杉山真二（1987）タケ亞科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、31, p.70-83.  
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.  
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9, p.15-29.  
藤原宏志（1998）稻作の起源を探る、岩波新書。

表1 多賀城市山王遺跡第83次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度(単位: × 100 個/g)

分類群(和名・学名)＼層位		No.1	No.2	No.3
イネ科	Gramineae (Grasses)			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	60	48	42
キビ族型	<i>Paniceae type</i>		6	6
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	30	36	12
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	18	12	6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	24	12	18
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	6		12
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	30	12	12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	12	6	6
その他	Others	6	6	6
未分類等	Unknown	150	108	114
(海綿骨針)	Sponge	12	18	12
プラント・オパール総数	Total	336	246	234
おもな分類群の推定生産量(単位: kg / m <sup>2</sup> · cm)				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.77	1.41	1.24
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.89	2.27	0.76
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.22	0.15	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.28	0.14	0.21
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.03		0.06
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.23	0.09	0.09
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.04	0.02	0.02

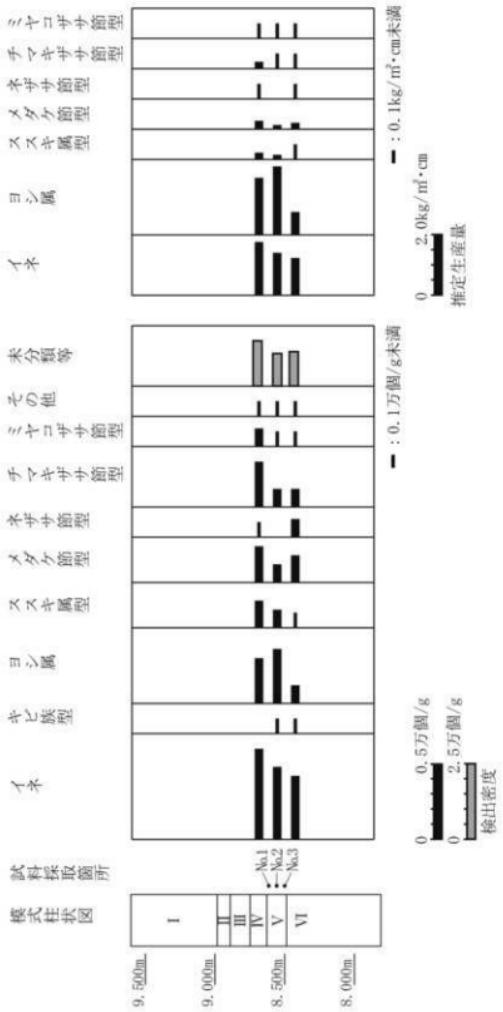
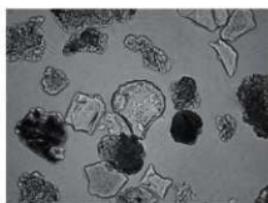
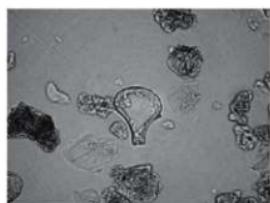


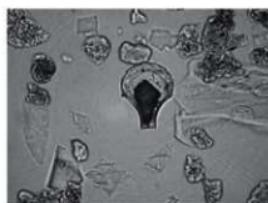
図1 山王遺跡第83次調査のプラント・オハール分析結果



イネ (試料No. 1)



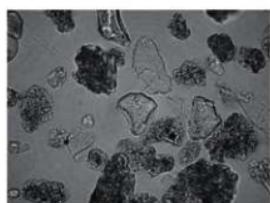
イネ (試料No. 2)



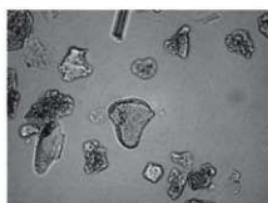
イネ (試料No. 3)



ヨシ属 (試料No. 1)



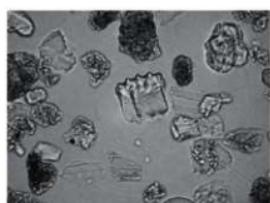
ススキ属型 (試料No. 1)



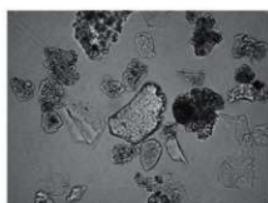
ススキ属型 (試料No. 3)



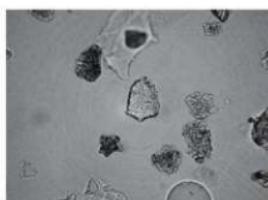
メダケ節型 (試料No. 1)



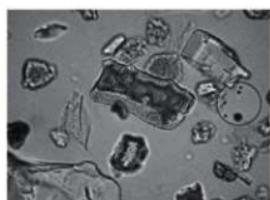
ネザサ節型 (試料No. 2)



チマキザサ節型 (試料No. 1)



ミヤコザサ節型 (試料No. 1)



キビ族型 (試料No. 2)



海綿骨針 (試料No. 3)

— 50  $\mu$ m

## 報告書抄録

ふりがな	たかさきこふんぐんほか							
書名	高崎古墳群ほか							
副書名	高崎古墳群第7次調査 小沢原遺跡第15次調査 山王遺跡第83次調査							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第104集							
編著者名	石川俊英、村松稔、鈴木琢郎							
編集機関	多賀城市教育委員会							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 TEL: 022-368-0134							
発行年月日	西暦2011年7月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎古墳群 (第7次)	宮城県多賀城市 高崎二丁目505外	042099	18002	38度 17分 39秒	140度 59分 48秒	20091126 ~ 20100127	50m <sup>2</sup>	宅地造成に 係る道路布 設他
小沢原遺跡 (第15次)	宮城県多賀城市 浮島二丁目28-8	042099	18043	38度 18分 04秒	141度 00分 12秒	20100409 ~ 20100429	80m <sup>2</sup>	共同住宅 新築工事
山王遺跡 (第83次)	宮城県多賀城市 山王二区129外	042099	18013	38度 17分 38秒	140度 58分 37秒	20100727 ~ 20101030	300m <sup>2</sup>	宅地造成に 係る擁壁設 置工事他
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高崎古墳群 (第7次)	古墳・集落	古墳時代	須恵器		下層(Ⅲ層)から古墳時代後期の須恵器が出土。			
		平安時代	掘立柱建物 堅穴住居	柱列				土師器
小原沢遺跡 (第15次)	集落	平安時代	掘立柱建物 溝 土壌	土師器 平瓦 円面硯	古代の掘立柱建物跡を発見した。			
山王遺跡 (第83次)	集落・都市	古墳時代	畦畔		灰白色火山灰降下以前とそれ以降の小溝・溝を発見し、下層から畦畔状の高まりを検出した。			
		平安時代	溝・小溝 土壌	土師器				須恵器
要約	高崎古墳群第7次調査では、古代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡などを発見した。また下層(Ⅲ層)からは古墳時代後期の須恵器が出土した。							
	小沢原遺跡第15次調査では、古代の掘立柱建物跡を発見した。							
	山王遺跡第83次調査では、上層から灰白色火山灰降下以前とそれ以降の小溝・溝跡を発見し、下層から水田跡とそれに伴う畦畔を検出した。							

---

多賀城市文化財調査報告書第104集

高崎古墳群 ほか

平成23年7月29日発行

発行 多賀城市教育委員会  
多賀城市中央二丁目1番1号  
電話 (022) 368-1141

印刷 株式会社工陽社  
宮城県塩竈市尾島町8番7号  
電話 (022) 365-1151

---



印刷には大豆油インキを使用しています。